宮城県文化財調査報告書１１９集

若柳町柴の脇遺跡
鳴瀬町里浜貝塚等

－昭和60年度詳細分布調査に伴う発掘調査報告書－

昭和 61 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

宮城県には私達の祖先が残した多数の文化財があります。しかし、近年の急激な都市化の波に洗われ、保護の手を差し延べなければ、たちまち消滅してしまう状況にある文化財も少なくありません。しかも、開発に伴い、最も保存の危ぶまれているのは、土地と結びつきの強い埋蔵文化財です。

宮城県教育委員会は文化財保護のため、開発にあたっては、関係機関と協議を行い調整をはかっておりますが、各方面からの理解も次第に得られるようになってきました。

今回報告するものは県営ほ場整備事業・県営かんがい排水事業・農村基盤総合整備事業など各種事業予定地での遺跡確認調査が大部分です。幸いなことに事業予定地が遺跡の範囲からはずれるもの、遺構・遺物包含層があっても工法の変更によって遺跡の保護がはかられたものが多く、破壊を前提とした大規模な発掘調査をせずに済んだことは、大変喜ばしいことと思っております。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護のために協議や調整にご理解をいただき、発掘調査にも多大なご協力をよせられた関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

昭和61年３月

宮城県教育委員会

教育長　**郷　古　康　郎**

目　次

〔1〕　調査に至る経過と調整の結果 …… 1
〔2〕　里浜貝塚 …… 4
　1．遺跡の立地と保護調整の概要 …… 4
　2．調査の方法 …… 4
　3．出土遺物 …… 4
〔3〕　柴の脇遺跡 …… 16
　1．竪穴住居跡 …… 16
　2．土壙 …… 19
　3．Ｅ区出土土器 …… 20
　4．住居内～周辺およびその他の地区出土土器 …… 25
　5．土製品・石製品 …… 26
　6．考察とまとめ …… 26
〔4〕　上谷横穴古墳群 …… 28
　1．遺跡の立地と調査に至る経過 …… 28
　2．調査の結果 …… 31
　3．まとめ …… 33
〔5〕　五輪原Ａ遺跡 …… 37
　1．遺跡の立地と調査の概要 …… 37
　2．出土土器 …… 38
　3．表面採集の石器 …… 41
〔6〕　土倉田遺跡 …… 41
〔7〕　鉾附神社古墳 …… 42
　1．立地と周囲の環境 …… 42
　2．調査の経過と内容 …… 43
〔8〕　孫兵衛谷地遺跡 …… 45
〔9〕　矢ノ目遺跡 …… 46
〔10〕　菅生田遺跡 …… 48
〔11〕　前田遺跡 …… 49
　1．遺跡の立地と調査の概要 …… 49
　2．発見された遺構 …… 49

例　　言

1．本書は宮城県の行う公共事業等に係る遺跡について詳細分布調査をおこなった発掘調査報告書である。関連事業名・遺跡名については調査に至る経過の章を参考されたい。

2．調査は、宮城県教育委員会が主体者となり、文化財保護課が担当し、昭和60年度の国庫補助金を得て行ったものである。

3．工事に係る埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては開発部局や地元教育委員会から多大のご協力があった。記して感謝の意を表したい。

4．本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973年）を利用した。

5．本書の下記の地形図は建設省国土地理院発行のものを複製して利用した。

第11図－1/25,000「若柳・金成」　第24図－1/25,000「大河原」
第30図－1/50,000「川崎」　第36図－1/25,000「村田」
第43図－1/50,000「吉岡」

6．本書は調査員全員で協議しながら執筆し編集した。

7．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、もとめに応じて公開している。

調 査 要 項

1．遺跡名　調査に至る経過の章を参考されたい。

2．調査期間　発掘調査　－昭和60年4月～昭和60年12月
整理・報告書作成等－昭和60年12月～昭和61年3月

3．調査対象面積　合計　約152,700㎡

4．発掘調査面積　合計　約　8,960㎡

5．発掘調査主体者　宮城県教育委員会

6．発掘調査担当者　宮城県教育庁文化財保護課
調査員：藤沼邦彦・加藤道男・真山悟・阿部博志・佐藤則之・笠原信男
庶務　：岩住昭矩・曽根　章・鈴木千枝子

7．発掘調査協力機関　宮城県農政部・宮城県土木部・宮城県企業局・大河原町・鳴瀬町・地元教育委員会（秋保町・蔵王町・丸森町・若柳町・岩沼市・鳴瀬町・白石市・大河原町・大和町）

〔1〕調査に至る経過と調整の結果

宮城県教育委員会は、開発関係部局に対し事業の策定段階で事前の協議を行うように要請し、埋蔵文化財の保護を計るよう努めている。そのため、詳細分布調査による確認調査を行い、遺跡の範囲・性格・構造などの概要を把握し、協議のための資料を得るようにしている。しかし開発のための土地買収から工事の開始までの期間が短く、必要な確認調査の期間が確保できないのが悩みである。こうした傾向は特に道路関係のものに多い。農政関係のうち、ほ場整備事業などは早くから協議があり、確認調査の資料に基づき工法の変更などによって、遺跡の保存が計られるようになってきたことは幸いである。

昭和60年度における国庫補助事業に関わる埋蔵文化財の調査として次のものが計画された。１から４までは詳細分布調査による確認調査を行い、協議ののち事前の発掘調査に移行するもの、５から９は詳細分布調査による確認調査を行い、協議の資料を得るに留め、事前調査は来年度以降に行うものとした。

〔1〕の表①

	遺　跡　名	開発事業名	担当部局
1	秋保町五輪原遺跡	県営ほ場整備事業	宮城県農政部
2	〃　土倉田遺跡	〃	〃
3	蔵王町鉾附神社古墳	〃	〃
4	丸森町矢ノ目遺跡	県営かんがい排水事業	〃
5	蔵王町円田入Ｂ遺跡ほか４遺跡	県営農道整備事業	宮城県企業局
6	鳴瀬町里浜貝塚	農村基盤総合整備事業	
7	花山村小田裏Ａ遺跡ほか１遺跡	国営迫川上流農業水利事業	東北農政局
8	蔵王町台遺跡ほか５遺跡	仙南仙塩広域水道用水供給事業	宮城県企業局
9	大和町前田遺跡	鳴瀬川水系吉田川総合開発事業	宮城県土木部

しかし、このうち５・７・８については地権者の了解が得られなかったり、現地を踏査した結果、立会調査で済みそうなものなどがあったため調査は実施しなかった。また、１から４は詳細分布調査を実施した結果、工事区域が遺跡からはずれており、遺跡と工事の関わりが軽微であった。９は遺跡の範囲が小さく、確認調査の段階で遺跡の調査が完了してしまった。６は最も問題のある遺跡であったが、現地で協議を重ねた結果、計画および工法の変更によって遺跡の保護がはかられ調査は小部分に留まった。そのため、事前調査を予定していた１～４についても確認調査の段階に留まり、事前調査は必要がなくなった。したがって、年度の途中から協議の対象として上がってきた次の遺跡を追加して詳細分布調査を実施することになった。

〔1〕の表②

	遺　跡　名	開発事業名	担当部局
1	若柳町柴の脇遺跡	県営ほ場整備事業	宮城県農政部
2	岩沼市孫兵衛谷地	県営かんがい排水事業	〃
3	白石市菅生田遺跡	仙南広域水道用水供給事業	〃
4	大河原町大谷横穴古墳群	大河原町の緊急地滑り対策	大河原町

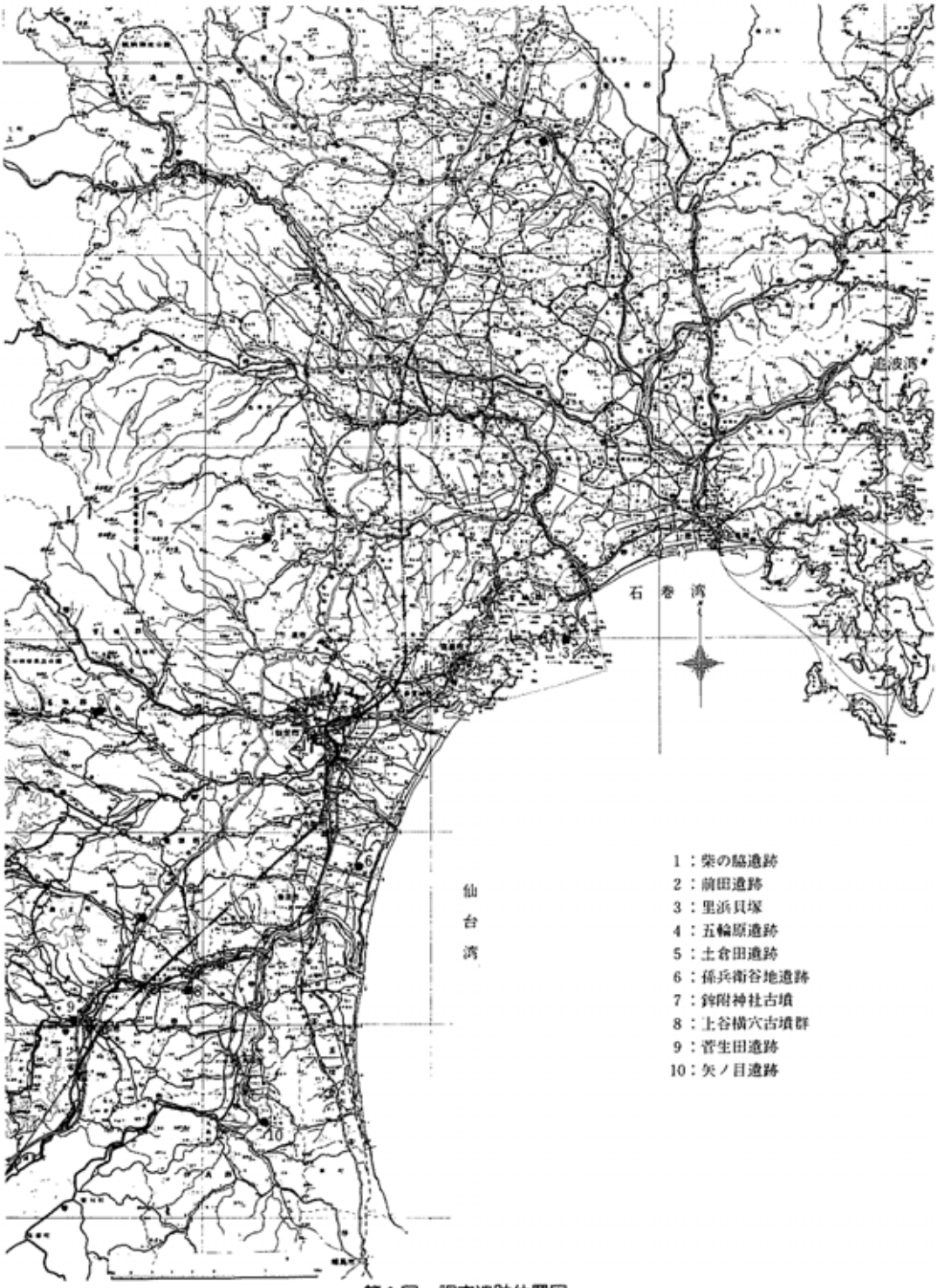
４遺跡の追加分のうち、２・３は工事区域が遺跡の範囲から外れていたため問題はなかった。しかし、１については予想以上に遺跡の広がりが大きかった。そのため地元の土地改良区をふくめ協議を行い、水田面の変更が最も困難な部分について事前調査を行ったが、他の地域については土盛工法によって保存されることになった。４は大河原町が団地造成している区域に接してある横穴古墳群で、協議によってすでに保存区域に編入されていたのであるが、この保存区域に地割れが生じ、地滑りを起こしたものに緊急に対応したものである。

調査対象遺跡の調査面積・調査期間

今年調査した遺跡の一覧と調査面積・調査期間を次の表にまとめた。遺跡番号は『宮城県遺跡地名表』（昭和56年度）に登載された番号である。遺跡記号は発掘調査された遺跡につけた記号で、出土品にネーミングする時などに使用しているものである。

〔1〕の表③

	遺　跡　名	市町村名	遺　跡		調査面積		調査期間
			番　号	記号	対象面積	発掘面積	
1	五輪原遺跡	秋保町	16004	ＩＦ	4,000	800	6/10～6/15
2	土倉田遺跡	〃	16022	ＩＧ	2,000	400	6/16～6/17
3	鉾附神社古墳	蔵王町	05033	ＩＬ	7,200	660	10/28～10/29
4	柴の脇遺跡	若柳町	42020	ＩＭ	120,000	3,000	11/6～11/18
5	孫兵衛谷地跡	岩沼市	15012		1,500	300	6/13
6	矢ノ目遺跡	丸森町	10037	ＨＢ	9,000	1,200	10/17～10/24
7	里浜貝塚	鳴瀬町	71006	ＩＮ	1,000	50	6/6～6/12
8	菅生田遺跡	白石市	02032		500	50	11/26
9	前田遺跡	大和町	23077	ＩＰ	6,000	1,300	6/10,11　8/6,7
10	上谷横穴古墳群	大河原町	06002	ＩＪ	1,500	1,200	10/4～11/27
合　計					152,700	8,960	


石巻湾
仙台湾
1：柴の脇遺跡
2：前田遺跡
3：里浜貝塚
4：五輪原遺跡
5：土倉田遺跡
6：孫兵衛谷地遺跡
7：鉾附神社古墳
8：上谷横穴古墳群
9：菅生田遺跡
10：矢ノ目遺跡

第１図　調査遺跡位置図

〔2〕里浜貝塚

１．遺跡の立地と保護調整の概要

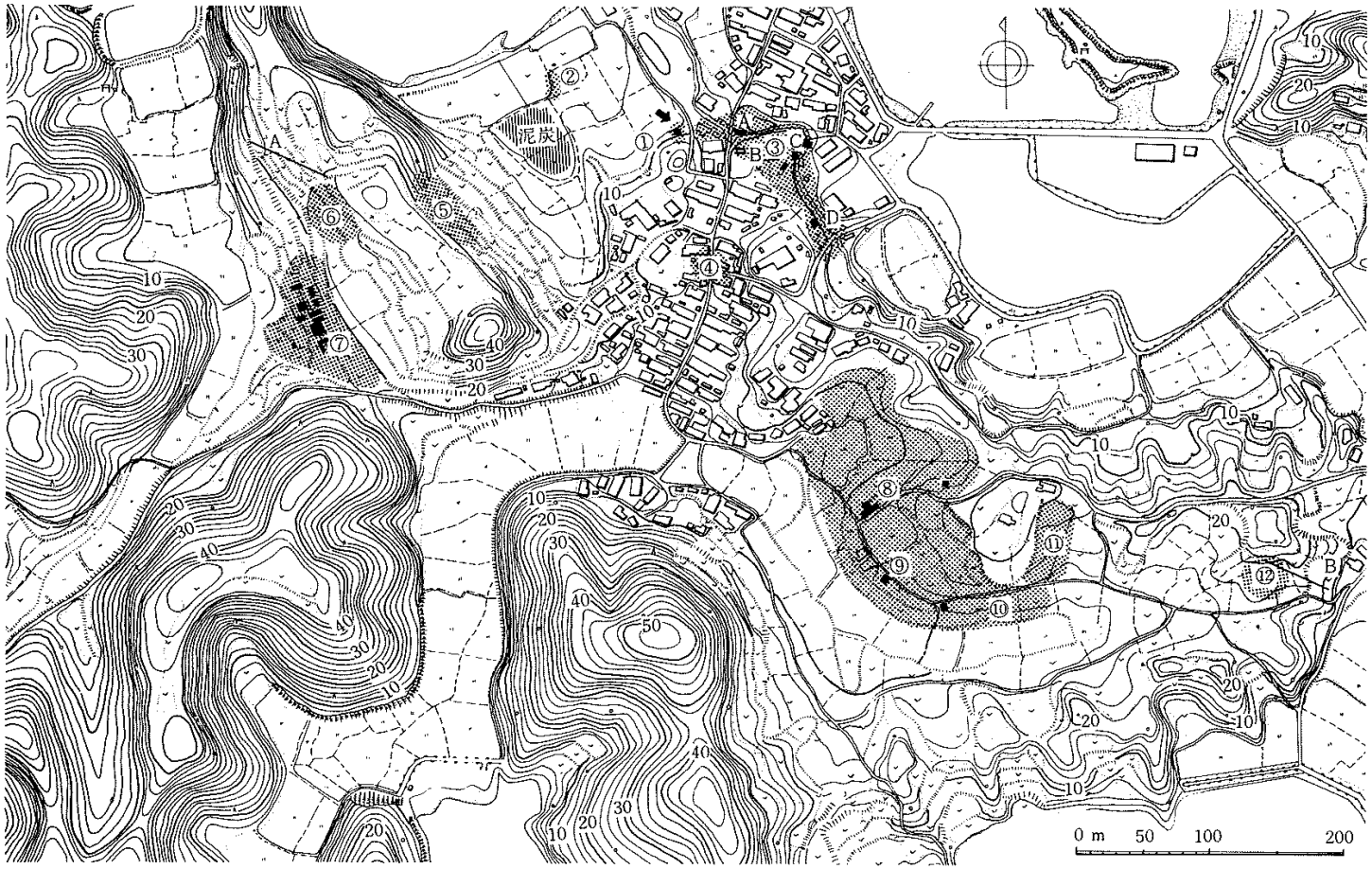
本貝塚は桃生郡鳴瀬町宮戸に所在する。宮戸島は松島湾の東部を限る湾内最大の島で、里浜貝塚は島のやや北西よりの里浜地区を中心に、丘陵台地から海岸にかけて広く立地するものである。時期によって貝層の分布が異なるので、小字名をとって遺跡名としたことがあるが、今は里浜貝塚で統一し、地点は地区名で呼ぶようにしている。今回の調査対象地は里浜の集落の東南側にある袖窪・畑中・梨ノ木地区で、貝層が広く分布する緩やかな南斜面一帯とその前面にある東西に細長い水田からなる。水田はほ場整備事業に関わるものであるが、水田下に南斜面の貝層が潜りこんでいる可能性があること、遺物を含む泥炭が発達している可能性があること、縄文時代の船着場（船溜まり）などの遺構が予想されることなどから、保存のための協議を重ねたところ、現在の水田の高さを減じないで工事を行うことが可能であることがわかり、計画の変更によって、この地域は破壊されることがなくなった。そのため水田部分の詳細分布調査は実施しないことになった。貝層の分布する地域のうち袖窪地区は道路に沿って農業用水を供給するための配水管を埋設する工事が計画されていた。掘削の幅は約30ｃｍ、深さ150ｃｍということである。この地域はどの場所を通過しても貝層にかかる可能性があり、むしろ道路に沿った部分のほうが貝層がかかる心配が少ないと思われたので、配水管工事の部分については詳細分布調査を行うことにした。まず、掘削の幅で表土を重機で剥ぎ取ると、２個所で貝層の上面があらわれた。そのため、工法の変更で配水管を浅く埋めることは出来ないか協議を重ね、その結果、貝層上面に配水管を設置し、所々に重石を深く埋め、それに配水管を結びつけて管の浮き上がりを防ぐことになった。そのため、実際の調査は重石をいれる縦30×横50×深さ30ｃｍの部分を７個所あけることで終了した。このほかに、台囲地区の貝層に近い風越地区の道路部分でも配水管設置工事の立会調査をおこなったが、遺構・遺物の発見はなかった。

２．調査の方法

配水管埋設ための調査では、２個所（東地点・西地点）で貝層が発見された。発掘した範囲では不明であるが、よく発達した深い貝層とおもわれる。発掘したのは重石をうめる７個所の狭い範囲であるが、貝層の堆積状況は良好であった。しかし、連日の雨のため、湧き水が多く、調査は簡略なものになったが、出来るだけ堆積層を分層し、すべての堆積土を採集し、のち１mmメッシュの篩にかけて、微細な遺物までも採集する方法をとった。層位については代表的なものの柱状図（第３図）を示す。なお、遺構の発見はなかったが、貝層からは多数の遺物が出土した。

３．出土遺物

すでに述べたように、今回の調査は配水管をおさえる錘となるコンクリートの台石を埋め込



第２図　調査区位置図（藤沼・岡村「里浜貝塚Ⅰ」1982より）

む部分に限ったため、面積30×50ｃｍの区画を７地点設定したのみで、総面積でも約10㎡にすぎない。しかし、出土遺物は豊富で、表土部分（貝層上面が一部含まれるが）のものも含めると、年代もある幅に限定されたまとまった資料となりうるものである。

出土品の種類は土器をはじめ円盤状土製品・石器・骨角製品などであるが、とくに骨角製品に良好な資料が多い。また、自然遺物も豊富である。以下、人工遺物と自然遺物に分けて説明する。

(1)　人工遺物

Ａ．土　器（第４～７図）

土器はすべて破片で、完全な形に復元できたものはない。図で示したものは口縁部資料のすべてと文様をもつ胴部資料に限定した。量が少ないので、独自の分類はせず、これまでの研究成果による土器型式にあてはめている。出土地点・層位・土器の特徴・所属型式名などについては表１を参考にして欲しい。結論的に説明すると、繊維を含む縄文時代前期前葉の土器一点、中期中葉の大木8b・大木９式数点を除くと、土器の大多数は表土採集のものをふくめ大木10式から南境武の古い部分に限定される。地文に縄文や撚糸文のみが施文されているものも、その特徴から大木10式から南境式にかけてのものと推定してよい資料である。

Ｂ．円盤状土製品（第８図１～５）

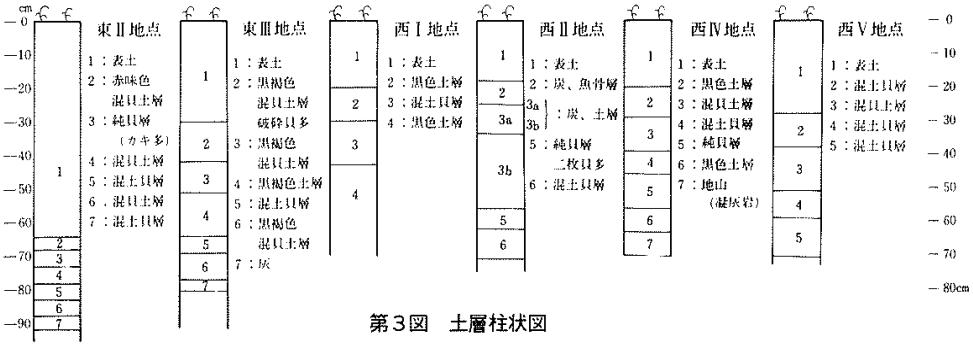
５点ある。出土地点・層位については実測図の脇に示した。すべて土器片を打ち欠いて円形または隅丸方形に整形したものである。なかには周辺を研磨しているものもある（研磨部は矢印で示した）。径４ｃｍ前後の大きいものと２～３ｃｍの小さいものに分けられる。利用している土器片の型式は大木10式から南境式のものが多く、土製品の年代もその時期に限定される。

Ｃ．骨角牙製品（第９図１～17）

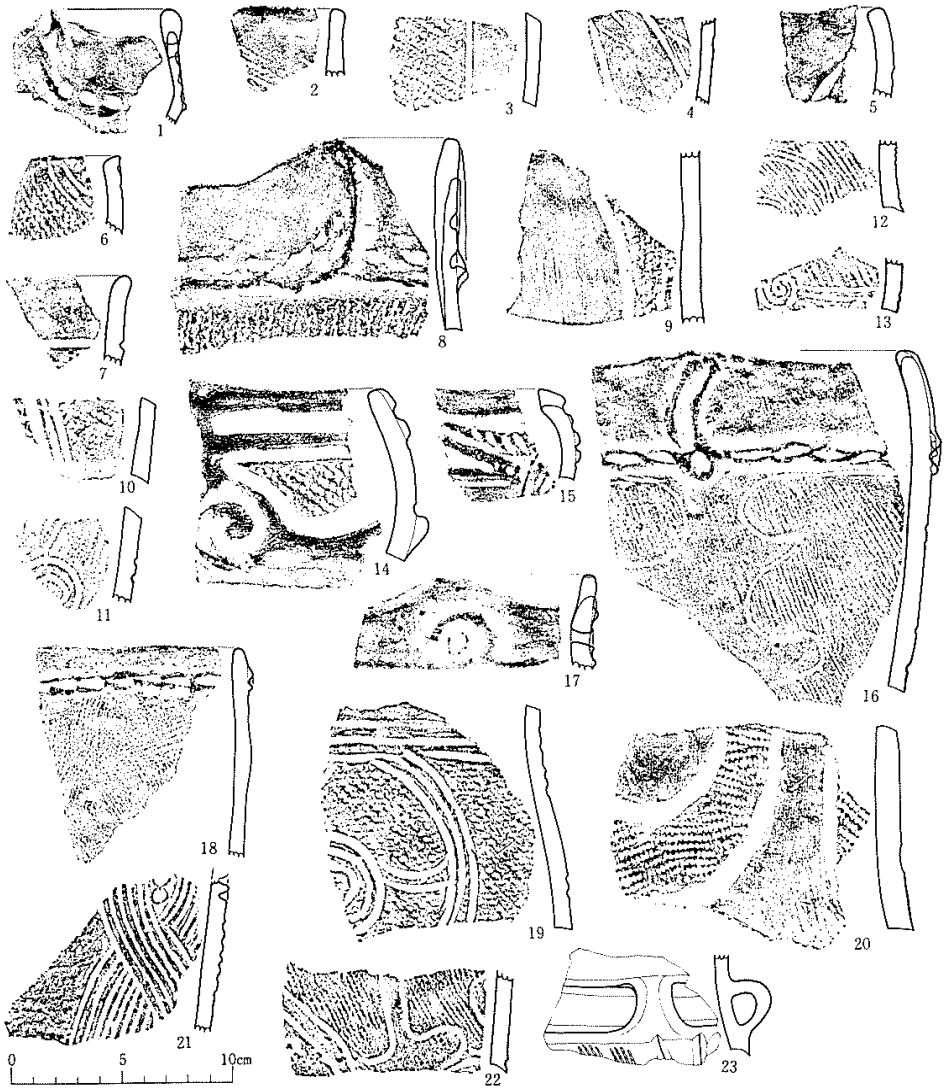
釣針・鏃・骨篦・刺突具・装身具などがある。出土地点・層位は表を参考にして欲しい。所属時期は共伴の土器によったが、表土出土のものもふくめ中期末の大木10式から後期初頭の南境武にかけての時期に限定されると考えている。

①　釣針（１～８）：８点ある。完形品に近いものを参考にすれば、大型のもの（１～４）と小型のもの（５・６）に分けられる。７と９は未成品であるが小型品に属するものであろう。大型品のうち返し部のある１は内側にあぐをもつが、他のものは欠損のためあぐの有無は不明である。小型品の５・６は明らかにあぐがない。大型品は角の表面の緻密質や内側の海綿質を残すものが多いが、小型品は丁寧にそれらを削り落としている。軸頂部をのこしている４点ともアスファルトなどの痕跡はない。なお、釣針は鹿角を縦に二分割し、板状に加工してから作り出したものと推定される。

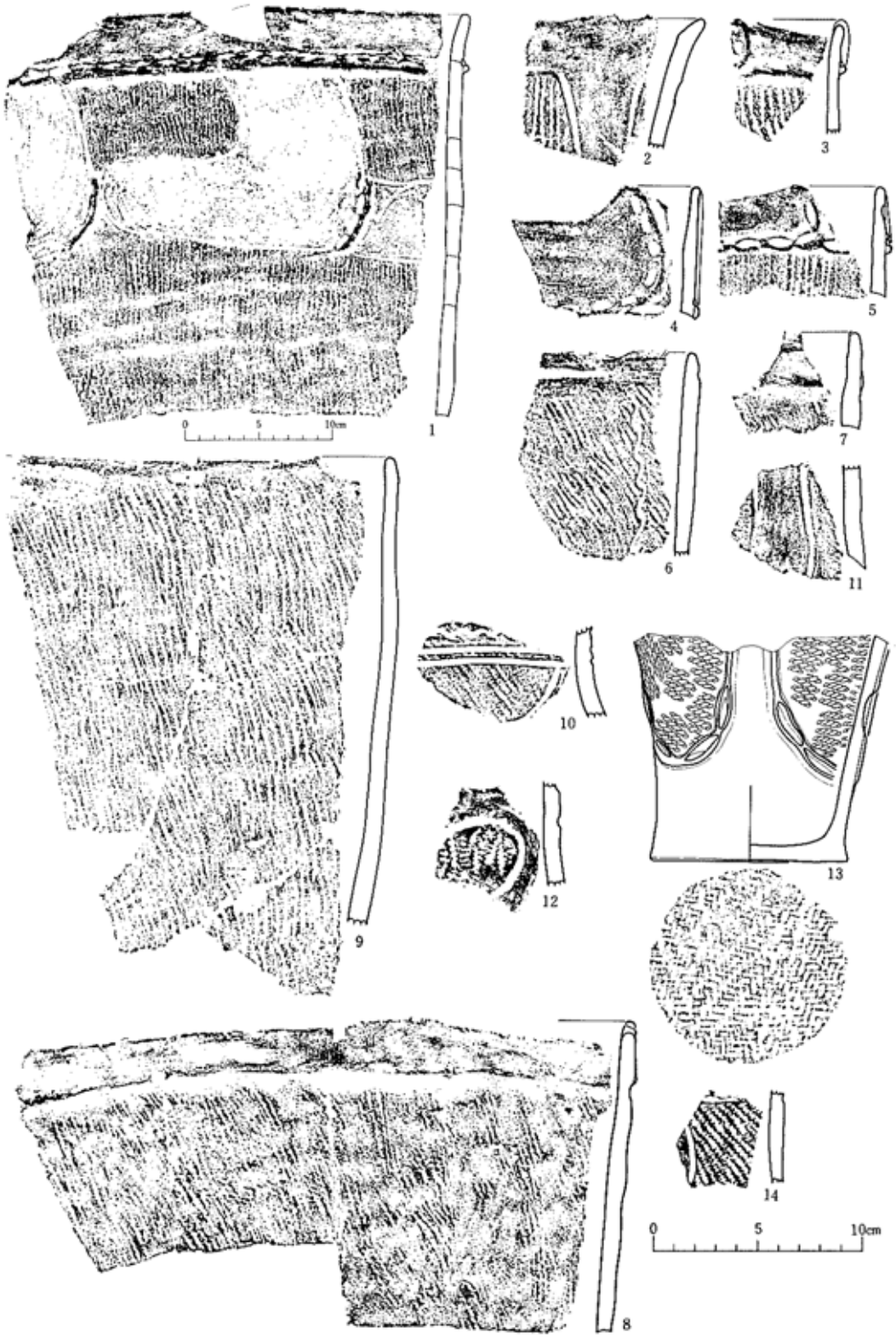
②　鏃(９)：１点ある。鹿角製で、身部と茎部に段がある。茎部にアスファルトなどの付着



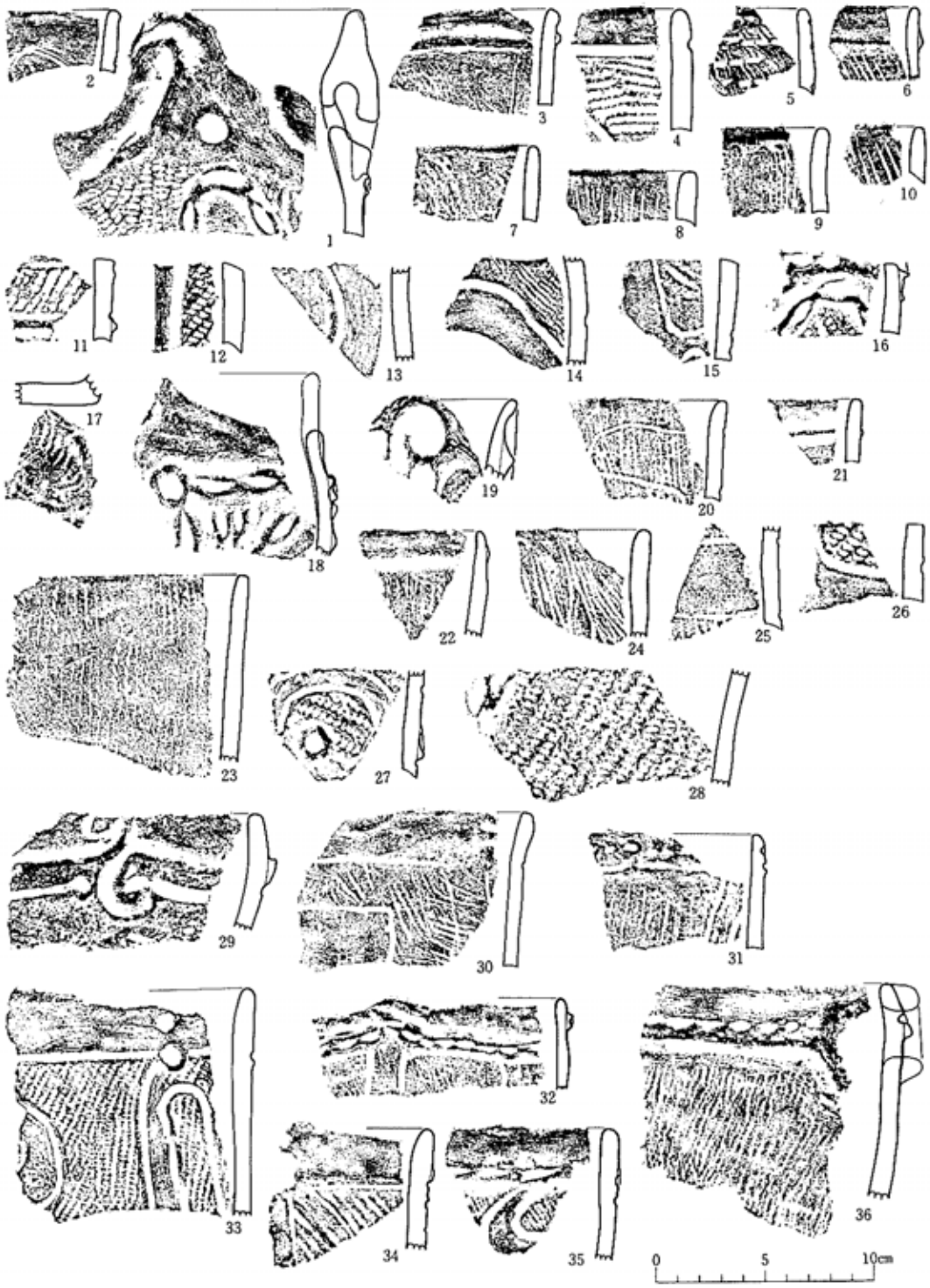
第３図　土層柱状図



第４図　東地区出土土器



第５図　西地区出土土器（1）



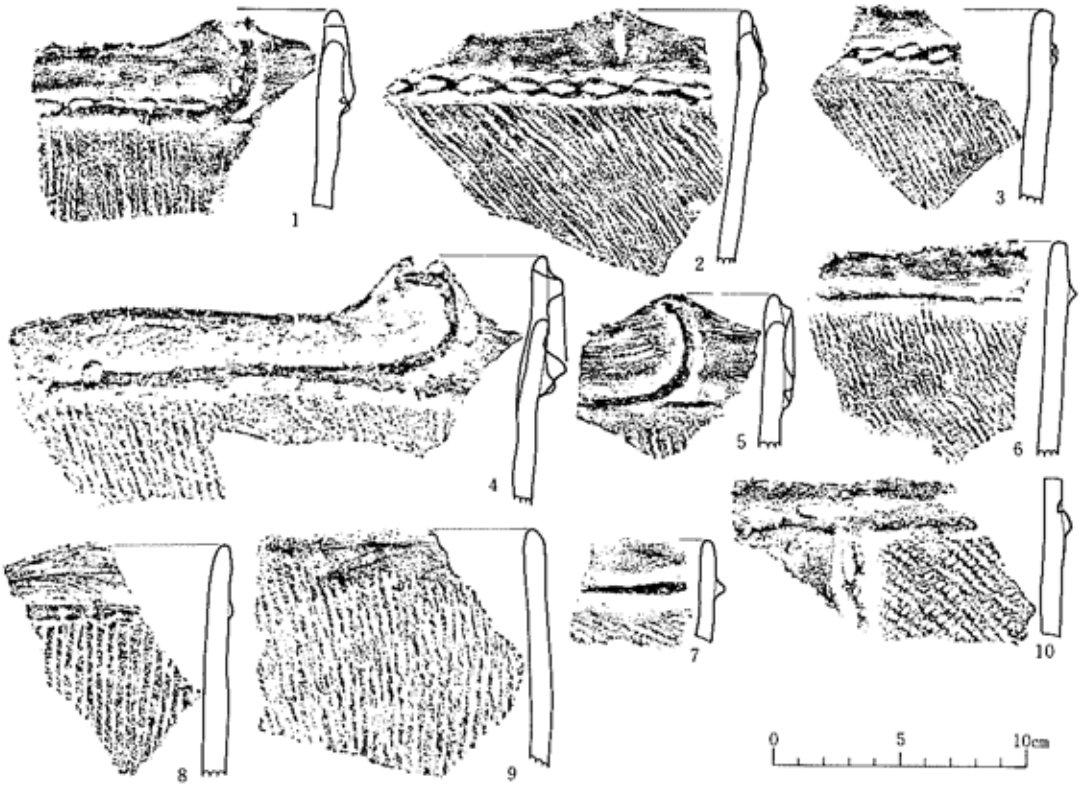
第6図　西地区出土土器（2）

はない。

③　骨篦(10)：１点ある。鹿の中足骨を縦に二分割し、骨端部を基部とする。他端は欠損しているが、劣らず丸みをもつと思われる。基部側にくらべ他端に近いほうの部分が表面に光沢があり、磨耗している。使用痕であろう。

④　刺突具（11～13）13点ある。11･12は鹿の中手骨を縦に四分割し、骨端部を基部とし他端を尖らせている（ただし、12は骨端部を欠損している）。13はマグロの鰭の骨で、全体を研磨し、一端を尖らせている。他端は欠損している。なお、12・13は尖端部に光沢があり、磨耗している。使用痕であろう。

⑤　装身具(14～16)：３点ある。14はイノシシの左上顎切歯に孔をあけたものである。15はキツネの左側の下顎骨を切り取って孔をあけたものである。第１・２切歯と第１・３後臼歯が抜け落ちている。16はサメ類の椎骨の脊索箇中央に孔をあけたものである。いずれも彩色や文様などはなく素材の形を生かした装身具といえよう。14はペンダント、15はペンダントあるいは根付けのような役割をはたしたものであろう。16はこの時期（中期末～後期初め）にみられ



第７図　西地区出土土器（３）

る土製の臼形耳飾りと大きさや形が共通するので耳飾りである可能性が強い。

⑥　楔？(17)：１点ある。鹿の中足骨あるいは中手骨を縦に割り、一端を薄く仕上げたもので、他端は欠損している。小さな破片であるが、楔として使用されたと思われる。

Ｄ．石　器（第10図１～８）

石鏃と石錐・石斧がある。いずれも堆積土を篩にかけて発見したものである。

①　石鏃(１～７)：７点出土している。基部が凹状のもの（１～４）と平坦なもの（５～７）がある。

②　石錐(８)：１点ある。四角形のつまみに短い錘部がつくものである。錘部の断面は逆台形である。

③　石斧（９）：１点ある。基部の破片で、側縁部は刃部に向かってふくらむ。

(2)　自然遺物

発掘調査中にも貝層中に魚骨がブロックで入っているのがみられたり、大型の海獣の骨などが目立ち、総体的に自然遺物が豊富であるという印象をうけた。堆積土はすべて持ち帰り、1mmメッシュの篩をかけて、自然遺物を採集する方法をとっている。まだ、同定の作業が進んでいないので、これまでわかったものの種名のみをあげるにとどめる。年代については層位ごと、地点ごとに整理したわけでないが、共伴する土器から、他の遺物同様に中期末の大木10式から後期初頭の南境式にかけてに限定されるものと考えて良いと思われる。

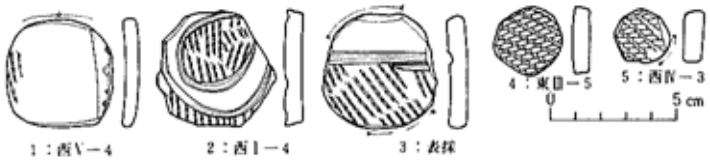
①　軟体動物門

腹足綱－イシダタミガイ・クボガイ・スガイ・ウミニナ・レイシ・イボニシ

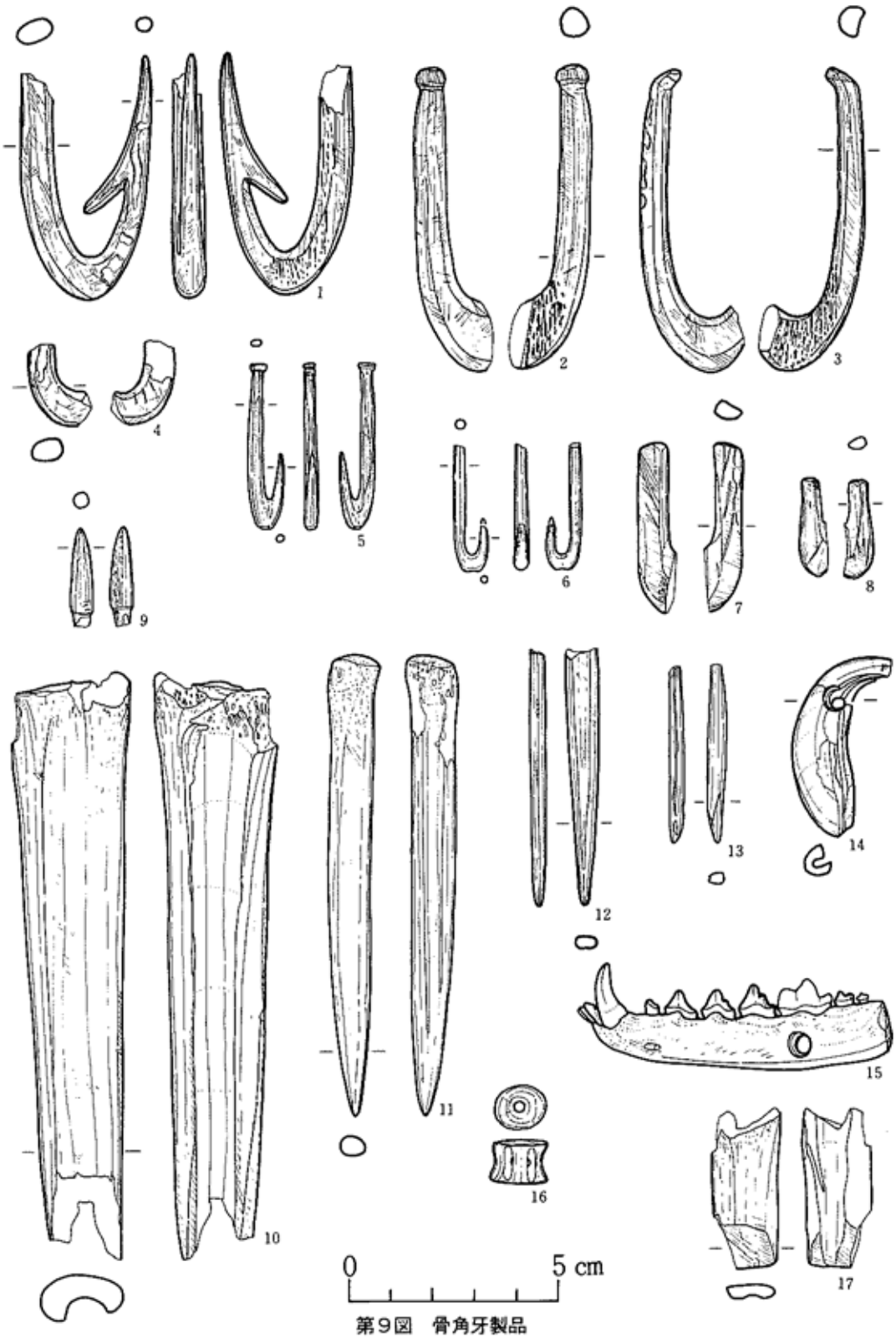
斧足綱－カリガネエガイ・イガイ・マガキ・ハマグリ・オキシジミ・アサリ

②　脊椎動物門

魚綱　－サメ・エイ・カスザメ・イワシ・ウナギ・マグロ・サバ・アジ・ブリ・スズキ・



第８図　円盤状土製品



第9図　骨角牙製品

第1表　出土土器　① 東地区

地点	層位	図			特徴	地文	型式
第Ⅱ地点	3	4－1	深鉢	口縁部	頸部がくびれ、口縁部が内傾気味に直立する。平口縁で、小波状突起がつく。突起部から垂下した隆線が頸部隆線と結合する。この隆線にそって連続刺突文あり。突起部下に円窓あり。	R撚糸文	大木10
	5	4－2			口縁部が直立	LR縄文	大木10
	5	4－3		胴部	沈線による区画文に充填縄文。	LR縄文	大木10
	5	4－4			沈線による区画文に充填縄文。	L撚糸文	大木10
第Ⅲ地点	2	4－5	深鉢	口縁部	口縁が内弯し、沈線による区画文が描かれている。	なし	大木10
	2	4－6			口縁が内弯、沈線による区画文が描かれ、刺突文が充填。	L撚糸文	大木10
	2	4－7			口縁部が直立する。頸部に沈線がめぐり、口縁部は無文。	LR縄文	大木10
	5	4－8			口縁部が直立。平口縁で、波状突起がつき、そこから垂下した隆線が頸部隆線と結合。隆線にそって連続刺突文。	L撚糸文	大木10
	4	4－9		胴部	沈線による区画文に充填縄文。	RLR縄文	大木10
	5	4－10			縄文施文後、沈線によって垂下文。	LR縄文	大木8b
	7	4－11			縄文施文後、沈線によって渦巻文。	LR縄文	大木8b
	4	4－12			縄文施文後、沈線によって渦巻文。	LR縄文	大木8b
	5	4－13			縄文施文後、沈線によって渦巻文。	LR縄文	大木8b
第1層		4－14	深鉢	口縁部	口縁部が内弯するキャリパー形、隆・沈線による横位渦巻楕円文が描かれ、縄文が充填。	RLR縄文	大木9
		4－15			口縁部が内弯するキャリパー形、隆・沈線で区画文が施文	なし	大木9
		4－16			口縁部が直立し、平口縁で、小波状突起がつく。突起部の隆線弧状文が頸部隆線と結合す結合部には盲孔が加えられている。頸部隆線上には連続刺突文がある。	R撚糸文	南境
		4－17			口縁部が直立し、平口縁で、小波状突起がつく。突起部上面に刻みがあり、その下部には半円状の隆線が頸部隆線と結合している。半円状隆線の内側には円窓がある。	なし	南境
		4－18			口縁部が直立し、平口縁で、頸部隆線上に連続刺突文が加えられている。	R撚糸文	南境
		4－19		胴	縄文施文後渦巻沈線文。	LR縄文	大木8b
第1層		4－20	深鉢	胴部	区画沈線文と充填縄文。	LR縄文	大木10
		4－21			縄文施文後多条沈線による弧状文。	LR縄文	南境
		4－22			撚糸文施文後区画沈線文（磨消縄文）。	L撚糸文	南境
		4－23	壺		頸部に橋状把手、そこから胴部にかけて隆線が垂下	R撚糸文	大木10

② 西地区

地点	層位	図			特徴	地文	型式
第Ⅰ地点	3	5－1	深鉢	口縁部	口縁部が直立。胴部文様は「ノ」字状の無文帯と方形の充填縄文帯が沈線で区画され、無文文帯の結合部は鰭状の隆線となる。鰭状隆線と頸部隆線にそって連続刺突文あり。	L撚糸文	大木10
	4	5－2			口縁部が外反し、沈線による区画文に充填文。	L撚糸文	大木10
	4	5－3			口縁部が直立。平口縁に波状突起がつき、突起部から垂下した隆線が頸部隆線と結合し、隆線に沿って連続刺突文。	L撚糸文	大木10
	4	5－4			口縁部が直立。平口縁に波状突起がつき、突起部から垂下した隆線が頸部隆線と結合し、隆線に沿って連続刺突文。	なし	大木10
	4	5－5			口縁部が直立。口縁端部が波状突起になり、突起部から垂下した隆線が頸部隆線と結合し、隆線上に連続刺突文。	R撚糸文	南境
	3	5－6			口縁部が直立。頸部に沈線がめぐる。	LR縄文 R綾結文	大木10 ～南境
	3	5－7			口縁部が直立。頸部に隆線がめぐる。	R撚糸文	
	4	5－8			口縁部が直立。頸部に隆線がめぐる。	R撚糸文	
	3	5－9			地文のみ。	R撚糸文	
	4	5－10		胴部	縄文施文後区画沈線文。	LR縄文	
	3	5－11			区画沈線文・充填縄文。	R撚糸文	大木10
	4	5－12			区画沈線文・磨消縄文によって文様。	RL縄文	南境
	4	5－13			隆線によって連鎖状懸垂文が施され、縄文が充填される。	LR縄文	南境
Ⅱ	2b	5－14	深	胴	沈線による蕨状の文様（磨消縄文）。	LR縄文	南境
第Ⅳ地点	4	6－1			口縁部が内弯。平口縁に波状突起がつき、その部分に橋状把手がつく。口縁部外側は鍔状に張り出す、文様は突起部下に隆線によって連鎖状懸垂文が施され、縄文が充填。	RL縄文	南境

③ 西地区

第Ⅳ地点	2	6－2	深鉢	口縁部	口縁部が外反し、沈線による区画文に縄文が充填。	LR縄文	大木10
	7	6－3			口縁部が直立し、頸部隆線の下に沈線による方形区画文	不明縄文	大木10
	4	6－4			口縁部が直立し、区画沈線文が描かれている。	LR縄文	南境
	7	6－5			口縁部が直立し、重層する長方形の連続刺突文。	R撚糸文	南境
	7	6－6			口縁部が直立し、頸部に隆線がめぐる。	R撚糸文	大木10～南境
	2	6－7			口縁部が直立。地文のみ。	L撚糸文	
	2	6－8			口縁部が直立。地文のみ。	R撚糸文	
	7	6－9			口縁部が直立。地文のみ。	条線文	
	7	6－10			口縁部が直立。地文のみ。	R撚糸文	
	7	6－11		胴部	隆線による区画文と充填縄文による文様。	LR縄文	大木10
	2	6－12			沈線による区画文と充填縄文による文様。	RLR縄文	大木10
	2	6－13			沈線による区画文と充填縄文による文様。	LR縄文?	大木10
	2	6－14			沈線による区画文と充填縄文による文様。	LR縄文	大木10
	2	6－15			沈線による区画文と充填縄文による文様。	LR縄文	大木10
	3	6－16			隆線によって連鎖状懸垂文が区画され縄文が充填。	LR縄文	南境
	2	6－17		底	胎土に繊維、底部外面には縄文が施文。	RL縄文	前期前葉
第Ⅴ地点	2	6－18	深鉢	口縁部	口縁部が内弯し、隆線による連鎖状懸垂文に刺突文が充填	なし	南境
	3	6－19			口縁部が外反し、口縁部から胴部にかけて隆・沈線による縦位渦巻文が描かれ、縄文が充填。	RLR縄文	大木9
	2	6－20			口縁部が直立。垂下波状沈線文。	L撚糸文	南境
	3	6－21			口縁部が直立。頸部に隆線が巡る。	R撚糸文	大木10～南境
	3	6－22			口縁部が直立。頸部に隆線が巡る。	R撚糸文	
	4	6－23			口縁部が直立。地文のみ。	R撚糸文	
	3	6－24			口縁部が直立。地文のみ。	R撚糸文	
	5	6－25		胴	沈線による区画文に縄文を充填。	R撚糸文	大木10

④ 西地区

第Ⅴ地点		6－26	深鉢	胴部	沈線による区画文に縄文を充填。	RL縄文	大木10
		6－27			沈線による渦巻文の末端に小輪を貼付。	LR縄文	南境
		6－28			隆線による連鎖状懸垂文に縄文を充填。	RL縄文	南境
第1層		6－29	深鉢	口縁部	口縁部が内弯する。平口縁に突起がつき、その下に隆・沈線による渦巻文がみられる。	LR縄文?	南境
		6－30			口縁部が直立。沈線による方形区画文に縄文を充填。口縁部に上下2個の刻み。	L撚糸文	大木10
		6－31			口縁部が直立。沈線による方形区画文に縄文を充填。口縁にそって刺突文。	R撚糸文	大木10
		6－32			口縁部が直立。方形区画文。	R撚糸文	南境
		6－33			口縁部が直立。懸垂文。	LR縄文	南境
		6－34			口縁部が直立。区画沈線文。小輪・頸部隆線上に刺突文。	LR縄文	南境
		6－35			口縁部が直立。区画沈線文。小輪・頸部隆線上に刺突文。	R撚糸文	南境
		6－36			口縁部が直立。頸部に隆帯にそって刺突文。	R撚糸文	大木10
		7－1			口縁部が直立。頸部の隆帯にそって刺突文。	R撚糸文	大木10
		7－2			口縁部が直立。頸部の隆帯上に刺突文。	R撚糸文	南境
		7－3			口縁部が直立。頸部に隆帯上に刺突文。	R撚糸文	南境
		7－4			口縁部が直立。頸部に隆帯。	R撚糸文	大木10～南境
		7－5			口縁部が直立。頸部に隆帯。	L撚糸文	
		7－6			口縁部が直立。頸部に隆帯。	R撚糸文	
		7－7			口縁部が直立。頸部に隆帯。	LR縄文	
		7－8			口縁部が直立。頸部に隆帯。	R撚糸文	
		7－9			口縁部が直立。	R撚糸文	
		7－10		胴	方形の区画文に縄文を充填。	LR縄文	大木10

マダイ・クロダイ・ベラ・コブダイ・ヒガンフグ・フグ・メバル・カサゴ・アイナメ・コチ・ヒラメ

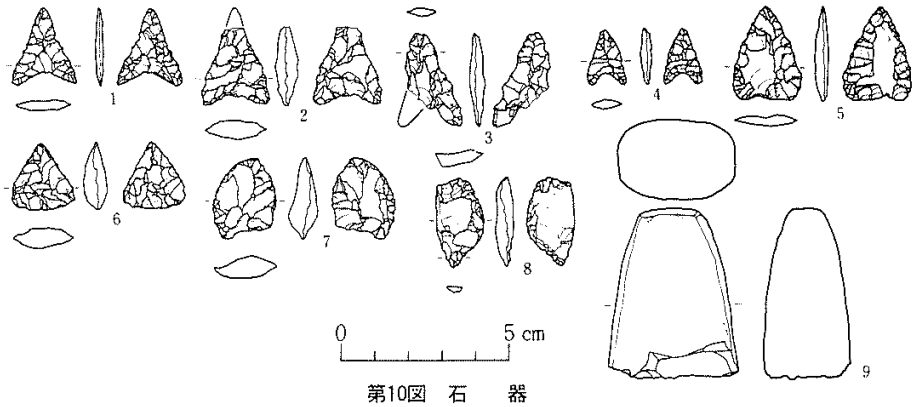
爬虫綱ーカメ

鳥綱　ーキジ・ウミスズメ・アビ・オオハム・カイツブリ・ミズナギドリ・ヒメウ・ウミウ・カモ・ハシブトカラス・カラス科

哺乳綱ーアナグマ・カワウソ・アシカ・アザラシ・イノシシ・シカ・クジラ類・ヒト

以上がこれまでわかった自然遺物であるが、軟体動物門ではアサリ・スガイが多く、貝層を構成する貝類の代表となっている。また、部分によってはマガキの多い貝層もみられた。魚骨はマダイ・スズキ・カサゴが多数出土している。また、所々にみられた魚骨のブロック層にはアイナメ・イワシが集中していた。網などで大量捕獲し、処理したのちに不要部分をまとめて捨てた結果であろう。鳥骨ではウミウ・カモなどが多い。哺乳類の骨ではアシカ・アザラシ類が多く出土しているのが注目された。全体的に自然遺物からみた動物相は哺乳類をのぞけば現在でも松島湾に棲息するものが多い。自然遺物の量的比率を別にすれば、この点は東北歴史資料館で調査した里浜貝塚の西畑地区の晩期（大洞C2式期）の在り方と変わりはない。

なお、自然遺物の同定には金子浩昌氏（早稲田大学講師）の指導を受け、岡村道雄氏（東北資料館）の協力があった。



第10図　石　器

第２表　骨角牙製品

No.	出土品	地点・層位	長さmm	No.	出土品	地点・層位	長さmm
1	釣針	西ーⅡー3	(58)	10	骨篦	西ー表土	(141)
2	釣針	西-Ⅱ-不明	(73)	11	刺突具	西ー表土	110
3	釣針	西ー表土	73	12	刺突具	西-Ⅲ-不明	(62)
4	釣針	東ー表土	(20)	13	刺突具	東ーⅠー3	(43)
5	釣針	東ー表土	40	14	装身具	西-Ⅲ-不明	43
6	釣針	西ーⅥー3	(31)	15	装身具	東ー表土	72
7	釣針	西ーⅥー3	(41)	16	装身具	西ーⅥー7	10
8	釣針	東ーⅠー6	(24)	17	楔　？	西ーⅥー5	(38)

（　　）内は現存長

第３表　石器

No.	出土品	地点・層位	長×幅×厚mm
1	石鏃	西ー5ー3	24×19×2.6
2	石鏃	西ー2ー6	23.×20×7
3	石鏃	西ー4ー7	30.5×11.×4.3
4	石鏃	表土	16.3×11.5×3.3
5	石鏃	西ー5ー3	27.7×20.3×4
6	石鏃	西ー5ー3	19.7×18.6×6.8
7	石鏃	西ー1ー2	25.5×18.6×8.3
8	石錐	西ー4ー5	26.3×14×4.5
9	石斧	表土	50.×38.×25

（　　）内は現存長

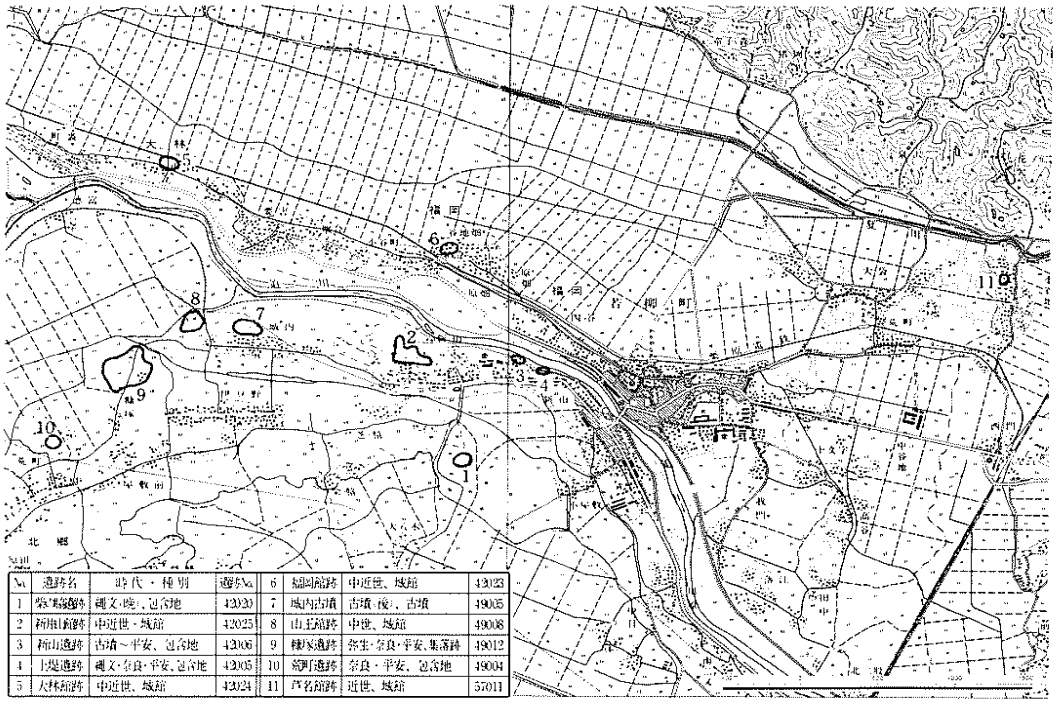
〔3〕 柴の脇遺跡

本遺跡は若柳町柴の脇に所在し、迫川によって形成された沖積地にのびる標高約９mの微高地上に立地する。現状は水田で、わずかに東に傾斜しているものの、ほぼ平坦な地形といってよい。『若柳町史』（文献２）によると、土器の散布範囲は広く、水田数枚にわたり、耕作の際など露出した破片を容易に採集することが出来たという。しかし、現地において地表面から観察しても、土器の散布は殆どなく、遺跡の中心部すらわかりかねた。そのため、ほ場整備事業地区内の排水路を中心にできるだけ広くトレンチを設定して、遺構と遺物包含層の確認につとめた。

その結果、調査対象区の北西部で北方から舌状の微高地が張り出して台地状を成し、その周囲に湿地が広がっていることが明らかになった。微高地中央には竪穴住居跡・土壙が検出され、縁辺には良好な遺物包含層が分布する。これらの確認された事実をもとに農政担当部局と協議した結果、大部分は保存されることになったが、田面の計画変更が困難であった区域約300㎡については事前の発掘調査を実施することとなり、住居跡１軒・土壙１基を精査した。なお、遺物包含層については内容確認のため、0.5㎡ほどを掘り下げている。

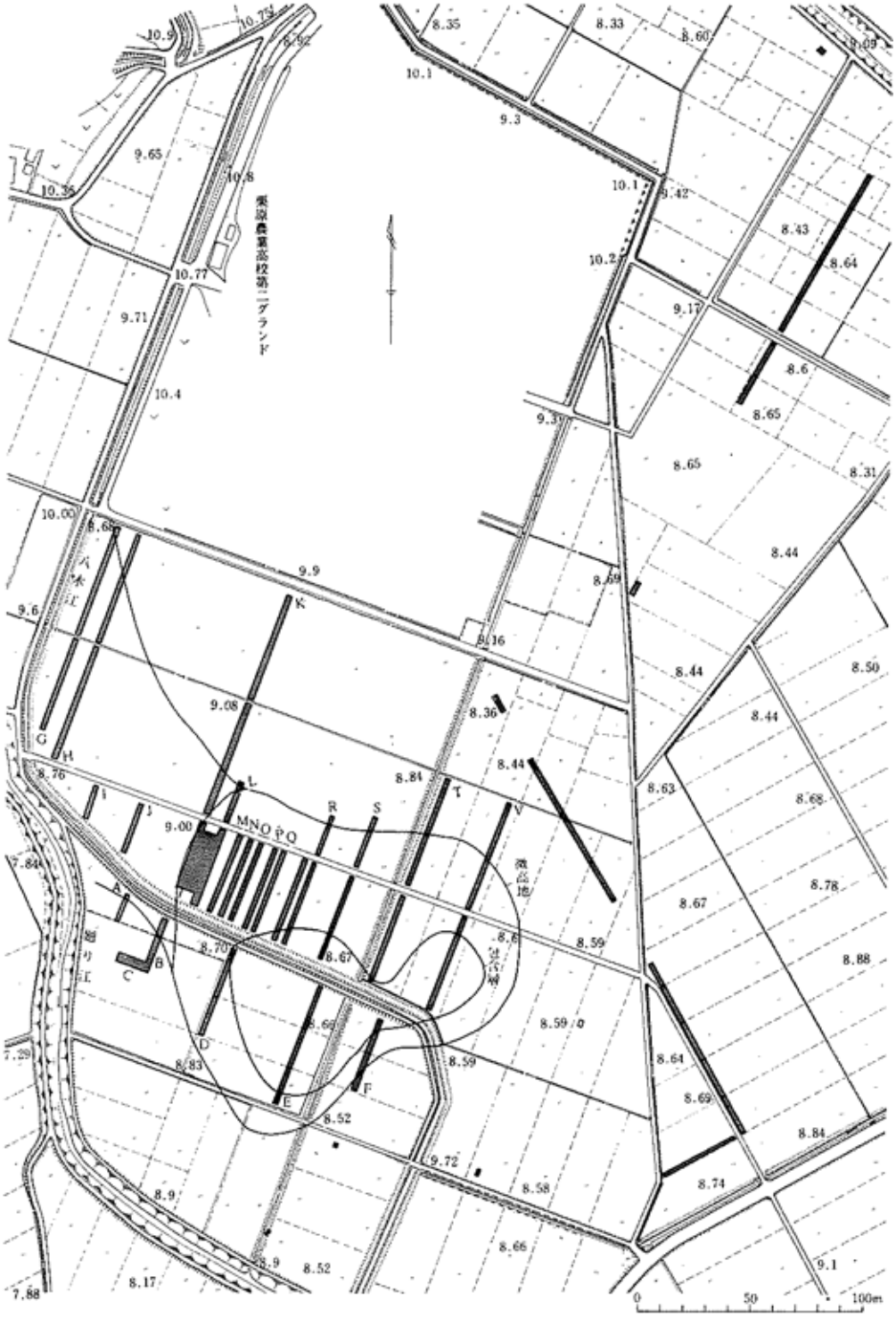
１．竪穴住居跡

水田耕作上下で確認されたもので、平面形は一辺が約3.5mの正方形を呈する。住居内は一様



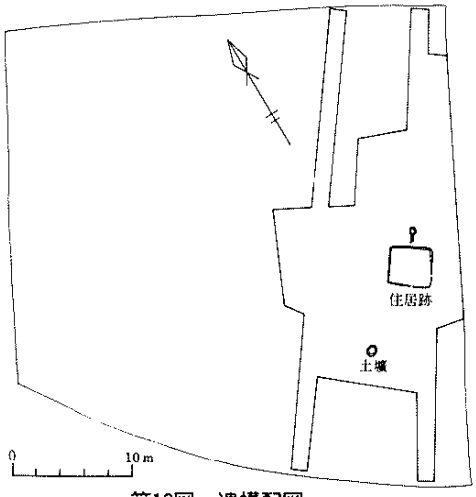
No.	遺跡名	時代・種別	遺跡No.	6	福岡館跡	中近世、城館	42023
1	柴の脇遺跡	縄文・晩、包含地	42020	7	城内古墳	古墳・後、古墳	49005
2	新田館跡	中近世・城館	42025	8	山王館跡	中世、城館	49008
3	新山遺跡	古墳～平安、包含地	42006	9	練家遺跡	弥生・奈良・平安、集落跡	49012
4	上堤遺跡	縄文・奈良・平安、包含地	42005	10	鶴町遺跡	奈良・平安、包含地	49004
5	大林館跡	中近世、城館	42024	11	芦名館跡	近世、城館	57011

第11図　遺跡の位置（国土地理院発行1/2万5千「若柳・金成」を複製）

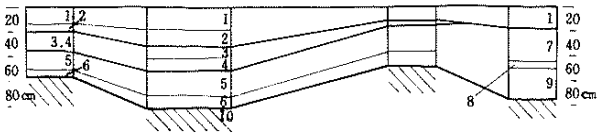


第12図　トレンチ配置図

に黒色土が堆積している。深さは５ｃｍと浅く、かなり削平を受けているものとみられる。黄褐色の地山を床とするが、全体にしまりがなく軟弱である。床面では北壁際のほぼ中央と、東寄りの２箇所に焼け面が検出され、このうち中央寄りの焼け面は、煙道とみられる遺構が対応する位置に検出されていることから、カマドの底面が残存したものと推定される。住居内からは縄文土器だけが出土しているが、カマドの存在が推定されることから住居の年代は古墳時代以降と考えられ、周辺から平安時代の土師器が出土しているので、同様な時期であろう。

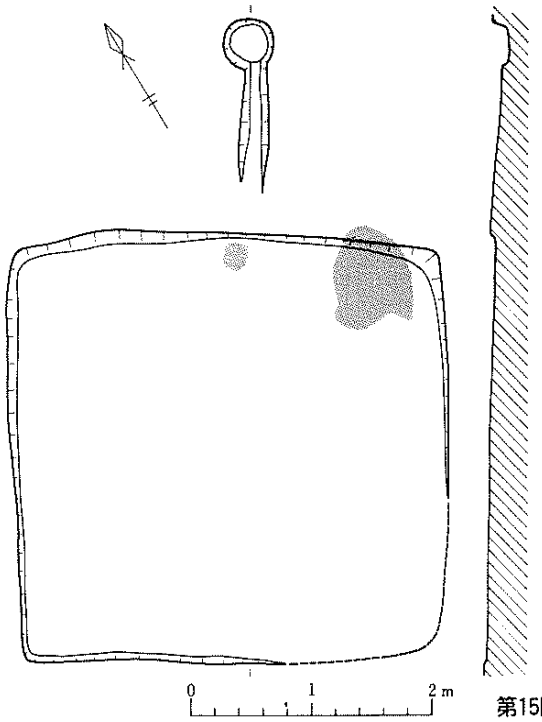


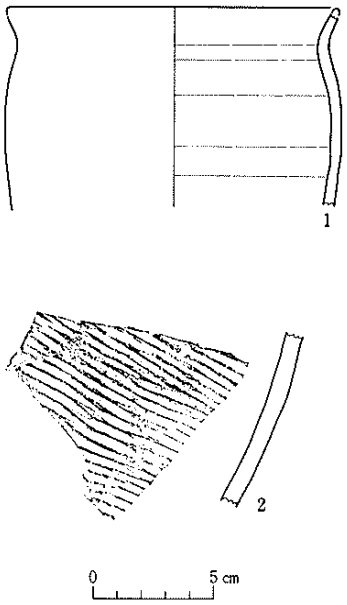
第13図　遺構配図



層No.	土色・土性	備考	遺物
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	水田耕作土	
2	褐　色(10YR4/4)シルト	遺物を含む	2上
3	黒　色(10YR3/1)シルト	炭化物、酸化鉄を含む遺物包含層	2下
4	黒褐色(10YR3/2)シルト		3
5	褐　色(10YR4/4)シルト	酸化鉄を多く含む、遺物少量含む	4
6	褐灰色(10YR4/1)シルト	5より酸化鉄少ない　旧表土	
7	褐灰色(10YR5/1)シルト	スクモ層	
8	黒　色(10YR3/1)シルト	〃	
9	褐灰色(10YR5/1)シルト	〃	
10	黄橙色(10YR7/6)シルト	地山	

第14図　Ｅ区基本層位(柱状図)

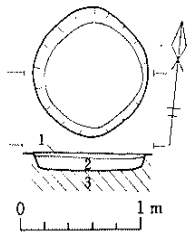




第15図　住居跡とその周辺出土土器

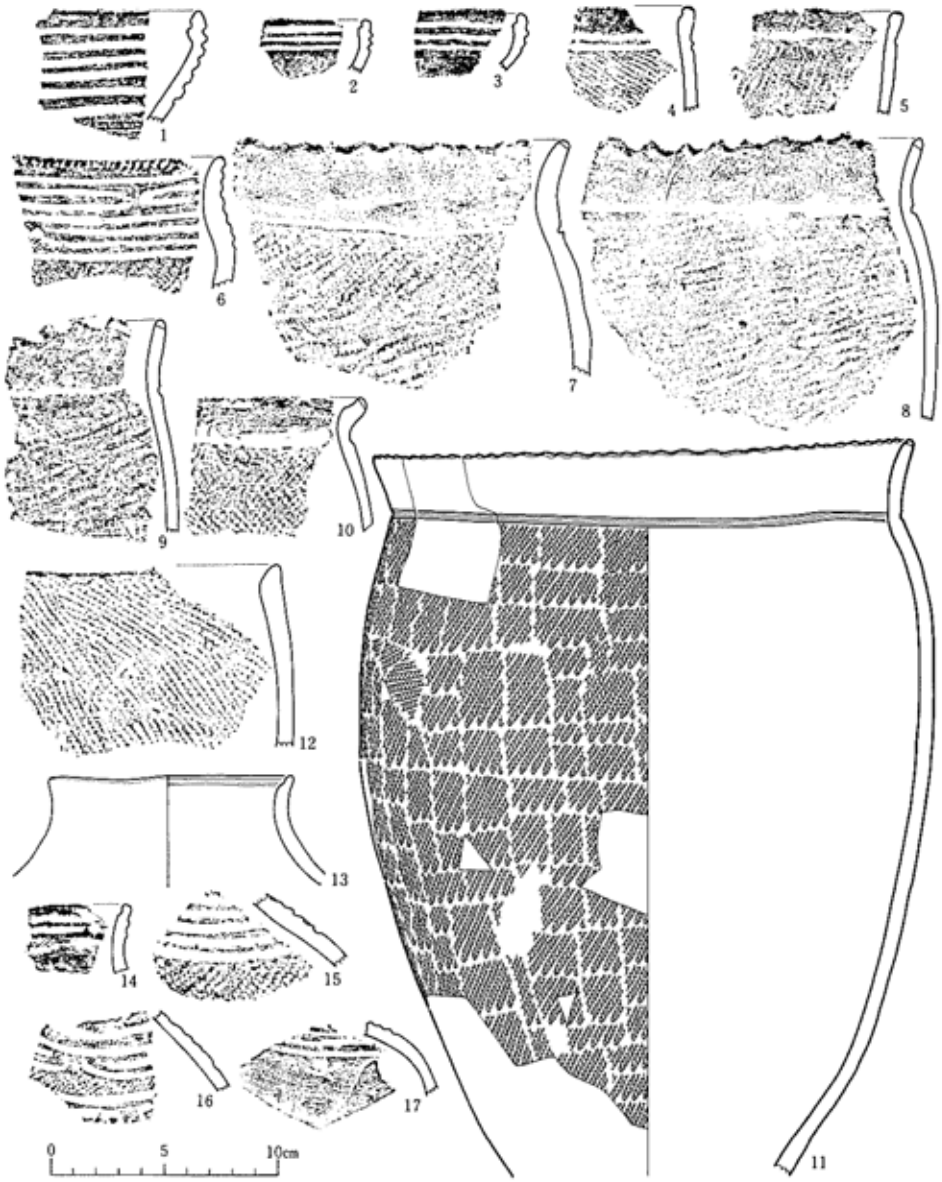
2．土　壙

黄褐色の地山面で確認された。径約1.0mの円形を呈するもので、深さは約20ｃｍを計り、底面はほぼ平坦である。黒色の堆積中からは縄文土器が少量出土している。性格は不明である。年代は縄文時代晩期と思われるが、住居跡に近接するので平安時代の土壙に縄文土器が混入した可能性も考えられる。



層No.	土色・土性	備　考
1	黒　色(10YR2/1)土	遺物を含む
2	暗褐色(10YR3/3)土	地山崩壊土をブロック状に含む
3	褐　色(10YR5/4)土	地山

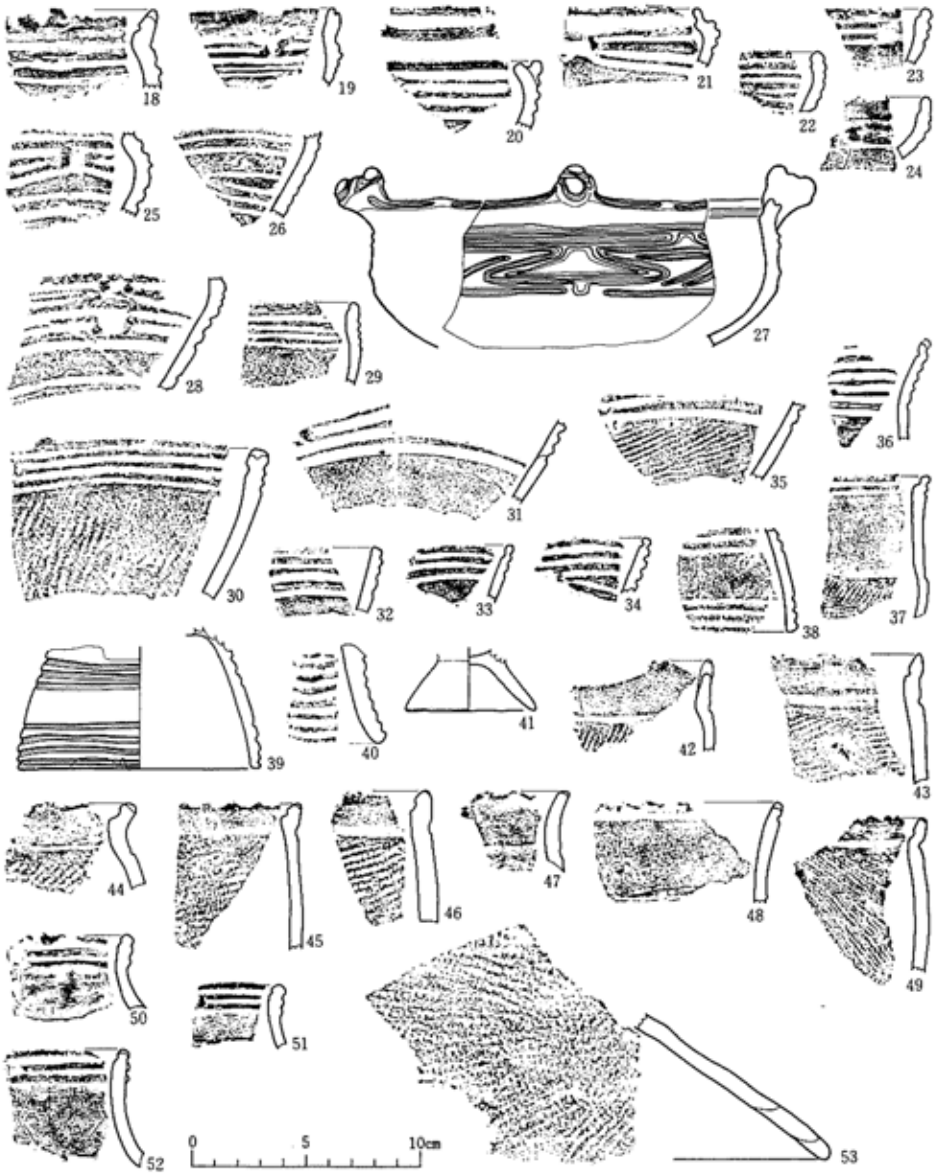
第16図　土　壙



第17図　Ｅ－７区第３・４層出土土器

３．Ｅ区出土土器

包含層の一部を、内容確認のために掘り下げた箇所から出土した土器である。層位は第１層が表土、第２～第４層が遺物包含層、第５層以下が無遺物層である。表土排除後、明確な包含層を確認する過程で採集した遺物は基本的には第２層に含まれるものと考え、第２上層とし、それ以下の第２層から出土したものを第２下層として扱った。図では層位ごとに提示し、第３・４層は量が少ないのでまとめ、記述は全体を一括して分類している。



第18図　Ｅ－７区第２下層出土土器

第19図　E－7区第2上層出土土器

〈浅鉢形土器〉

口縁部資料

A類：胴部上位が内弯し、口縁部が外傾する器形（18・19・25～28・54～59・64・72）。

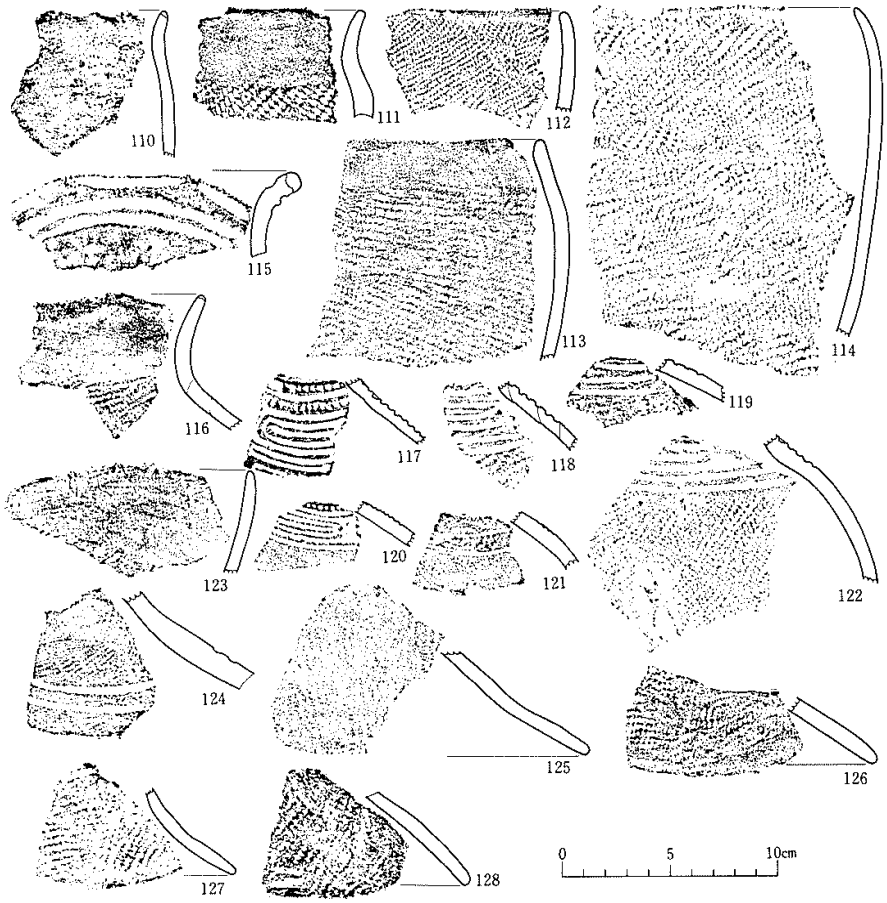
文様；横位沈線の一部を彫去した工字文（工字文－19）、偏平な三角形とその頂部を彫去した変形工字文（変形工字文ａ－25･27･28）、反転する沈線が三角形状を成す変形工字文（変形工字文b－54・64・72）、無文のもの（58・59）がある。

B類：胴部上位から口縁部にかけて内弯気味の器形（１～３・20～24・60～67・69～71）

文様；工字文ａ（24・62・63）、変形工字文ａ（21・60・61）、変形工字文ｂ（65）、偏平な楕円あるいは偏平な反転沈線による工字文（工字文ｂ－70・71）がある。

C類：胴部から口縁部にかけて外傾する器形（30・32～34・77・78・80～85）。

文様；工字文ａ（30）、変形工字文ａ（34）、横位沈線（32・33・77・78・82・84・85）、磨消縄文文様（80・81）がある。



第20図　Ｅ－７区第２上層出土土器

D類：胴部中位でくびれ、それ以上が外反、以下が膨らむ器形（36・37・79）。

文様；工字文ａ（36）、横位沈線（37）、磨消縄文文様（79）がある。

E類：胴部中位が丸みをもち、口縁部が外反する器形（76）。無文、内外面朱塗りである。

胴部資料（31・35・68・73～75）

文様；工字文ａ（31）、変形工字文ｂ（68）、横位沈線（35・73～75）がある。

第21図　住居内～周辺出土土器

底部資料（38～41・86～95）

文様：変形工字文ｂ（93）、波状文（88～91）、横位沈線（38～40･86･87･94･95）、無文（41）がある。

〈深鉢形土器〉

A類：頸部でくびれ、口縁部が外傾する器形（６～11・42～49・96～111）。

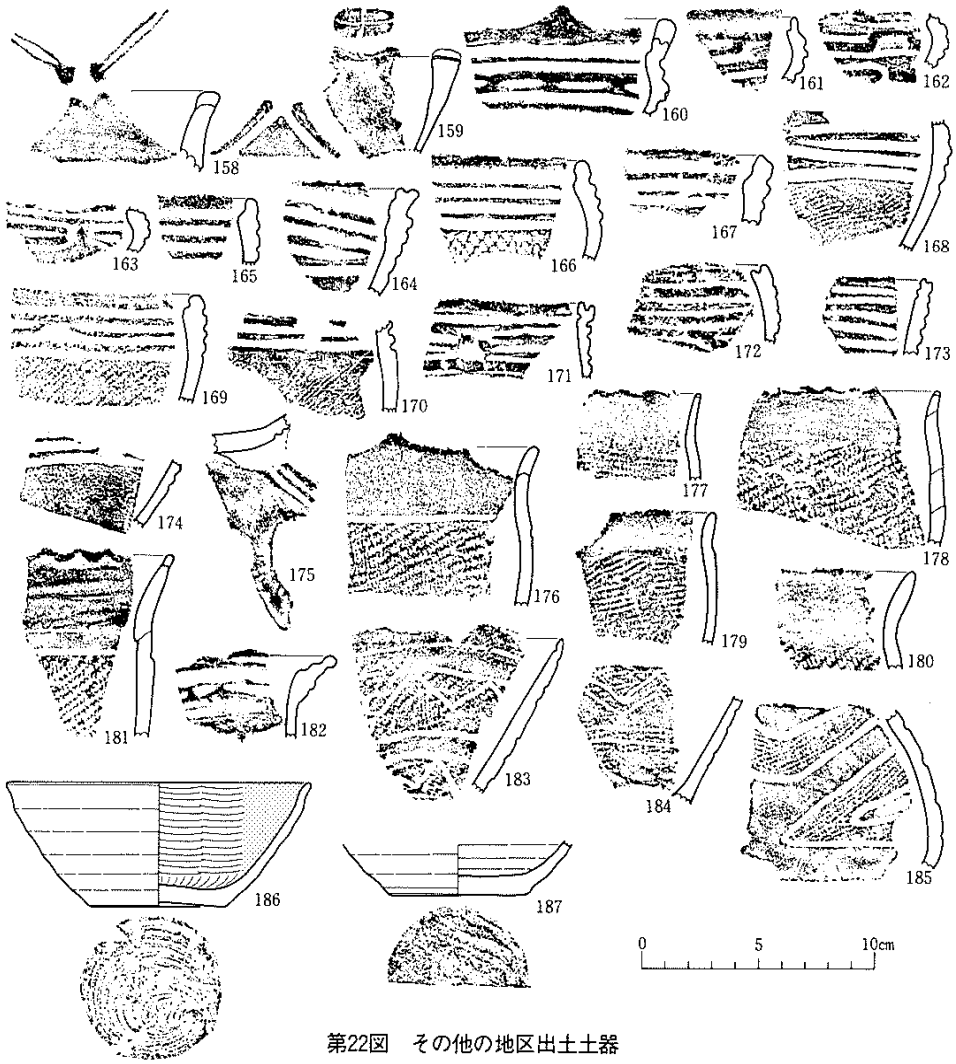
文様；工字文ｂ（６）、横位沈線（100）、地文のみ（７～11・42～49・96～99・101～111）。

B類：胴部から口縁部にかけて変化なく立ち上がる器形（12・112～114）。地文だけである。

〈壺形土器〉

口縁部に文様；工字文ａ（14・51・52）、横位沈線（50・115）、無文（13・116・123）。

胴部に文様；工字文ａ（122）、工字文ｂ（117・120）、磨消縄文文様（16）。



第22図　その他の地区出土土器

〈壺形土器〉

文様；横位沈線（125）、地文のみ（53・126～128）。

４．住居内～周辺およびその他の地区出土土器

〈浅鉢形土器〉

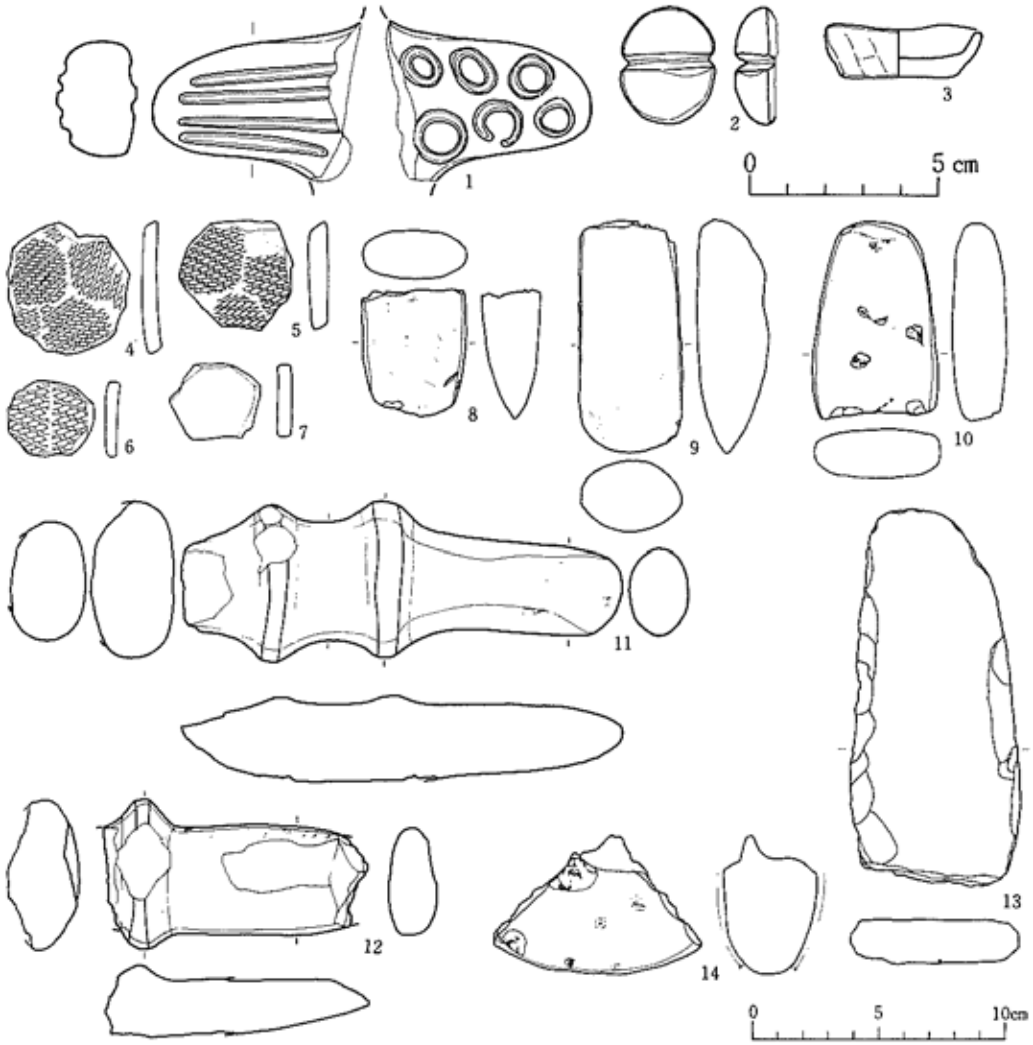
口縁部資料

A類：胴部上位が内弯し、口縁部が外傾する器形（158・160・164）。

文様；工字文ｂ（164）、浮線楕円文（160）、不明（158）。

B類：口縁部が内弯気味の器形（140～143・147･161～163・165～172）。

文様；工字文ａ（169・170）、変形工字文ａ(161・162・171)、変形工字文b（163）、単位不明の工字文(140・141・168・172)、沈線の一部を円形に彫去したもの（143）、横位沈



第23図　土・石製品

線（142・147・165～167）。

C類：胴部から口縁部にかけて外傾する器形（130・131・144～146・183）。

文様；変形工字文ａ（144・145）、横位沈線（146）、磨消縄文文様（130・131）、鋸歯状文（183）。

胴部資料

文様：横位沈線（174）、鋸歯状文（184）。

底部資料

文様：工字文ａ（156）、横位沈線（157・175）、地文と横位沈線（136）。

〈深鉢形土器〉

A類：頸部がくびれ口縁部が外傾する器形、地文のみ（133・134・148～152・176～180）。

平縁－152・179・180、波状口縁－133・134・148～151・176～178

B類：胴～口縁部まで変化なく立ち上がる器形、口縁部に横位沈線、口縁上端に刻目（132）。

C類：胴部中位でくびれ、以上が直線的に外傾する器形、入組文と瘤状突起（129・139）。

〈壺形土器〉

文様：口縁部に工字文ａ（135・153・182）、頸部に工字文ａ（154）、胴上部に工字文ａとｂ（155）、胴上半に磨消縄文による文様（185）がある。

〈その他の土器〉

土師器坏（186）－ロクロ使用、底部が回転糸切り。

須恵器坏（187）－底部は手持ちヘラケズリ。

５．土製品・石製品

土偶（１）腕部破片。表は４条の横位沈線、裏に６個の円文。

土錘（２）楕円形をし、縦・横に溝が巡る。

小形手捏土器（３）平底で、胴～口縁部が外傾する皿形。

円盤状土製品（４～７）いずれも土器の胴部破片を打ち欠いて整形したもの。４は縄文ＲＬ、５・６が縄文ＬＲ、７は無文。

磨製石斧（８～10）８・９は厚手のもので、８には刃部に使用痕がみられる。10は薄手のもので、刃部は欠損している。

独鈷石（11・12）11は平面形が一方にやや湾曲。中央の２箇所に節状の突帯をもつ。

石鏃（13）両面とも剥片剥離面を多く残し、縁辺にのみ加工が施されている。

磨石（14）上下面に磨面がみられる。

６．考察とまとめ

本遺跡において、土器が層位的にまとまって出土したＥ区の土器についてみると、器種として浅鉢形土器・深鉢形土器・壺形土器・蓋形土器があり、それらの特徴から年代は縄文時代晩

期末とその直後のものと考えられる。これらの土器を出土状況に即して検討すると次のようになる。

Ｅ区の遺物包含層は３枚の層（第２・３・４層）に分けられ、第２層については上・下部に分けて取り上げている。そして、その内容には若干の差異を認めることができる。

つまり、器種として第２上層で蓋形土器が増加しており、文様では第２下層に偏平な三角形の頂部を彫去した変形工字文ａが特徴的なのに対し、第２上層では反転する沈線により三角形状を描く変形工字文ｂが多く、また波状文と磨消縄文文様は上層に集中する。

このような土器のありかたを他遺跡の例と比較した場合、第２下層の土器については大洞Ａ’式とされる一迫町山王遺跡第Ⅳ層出土土器群（文献３）や古川市宮沢遺跡（文献４）出土のものに類似し、また第２上層の土器は東北地方において弥生時代初期とされる山王第Ⅲ層出土土器（同上）や青木畑遺跡出土土器（文献５）に類似している。本遺跡の場合断片資料が多く、詳細な比較は成し得なかったが、このような点を考慮すれば、第２層出土土器は上記の２時期に位置付けることが可能であり、おそらく他の地区に両時期の土器を明確に層位的把握ができる部分があるものと思われる。

その他、第３・４層出土の土器については、層位的には第２層の土器より古いが、数量に乏しく内容が十分に知り得ない。

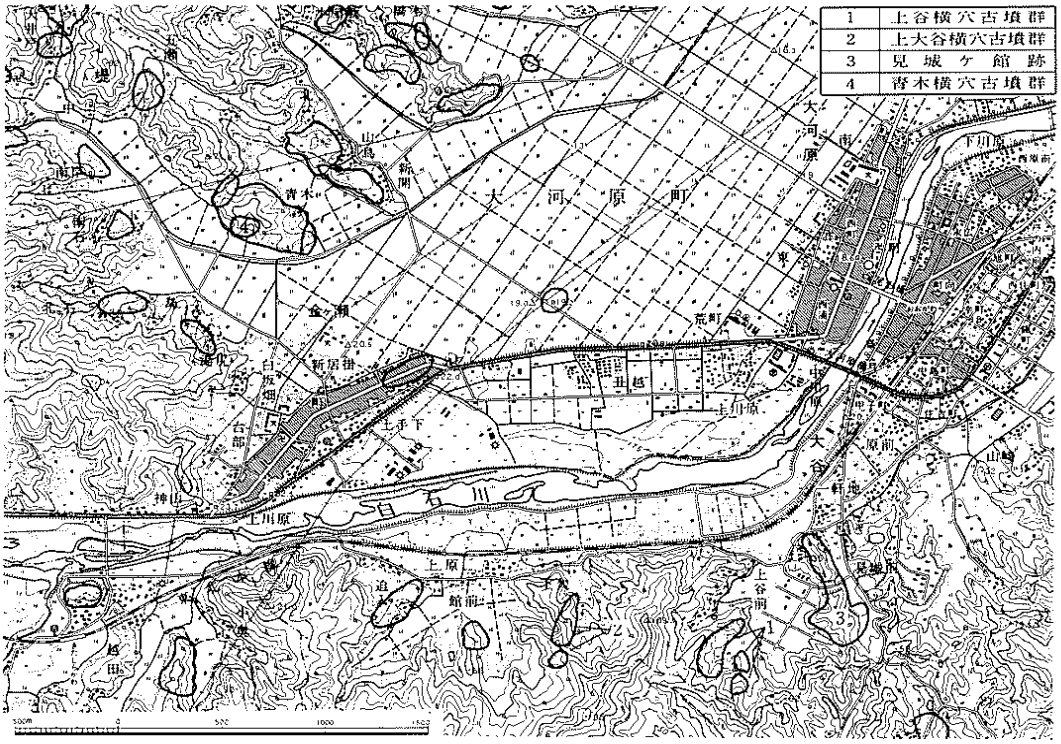
住居内～周辺とその他の地区の土器は層位的にまとまりのないものであるが、大部分はＥ区出土土器の年代幅の中におさまるものとみられ、ほかに少量入組文が施される後期後葉のもの（129・139）や、弥生時代でもＥ区のものより後出的な土器（183～185）がある。

〔4〕上谷横穴古墳群

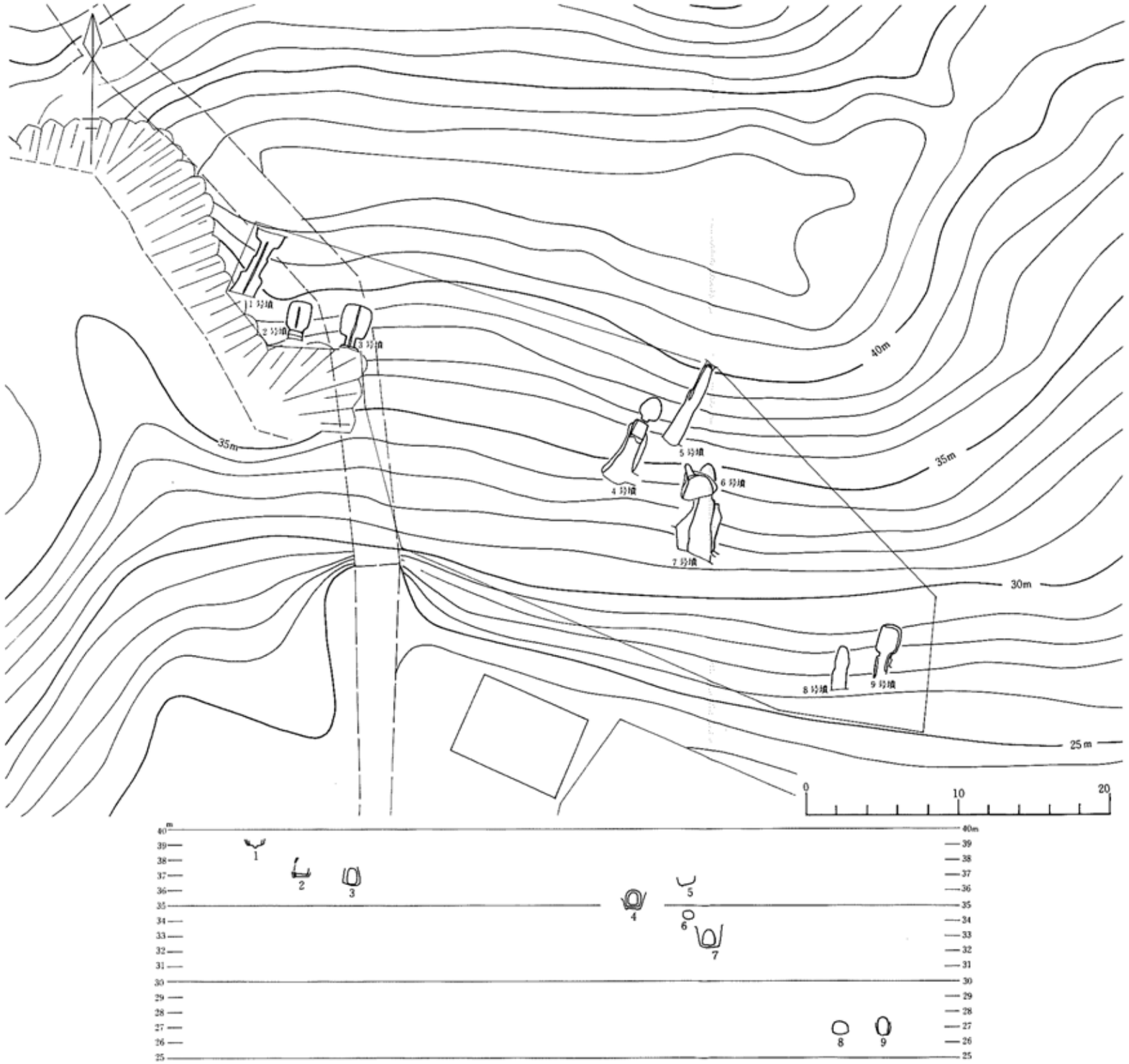
1．遺跡の立地と調査に至る経過

本遺跡は大河原町大谷字上谷前に所在し、広い谷に突き出た丘陵の斜面に立地する横穴古墳群である。『大河原町史(上巻)』（文献６）によると、横穴古墳は開口しているもの13基、未開口のもの約20基あるという。ここはもと凝灰岩の石切場であったので、採石の際に破壊されたものもあったであろう。

この古墳群の東側に大河原町によって団地造成が計画されたとき、町企画課･町教育委員会･県文化財保護課の三者によって協議され、丘陵の先端部の一部は切り取るが、古墳群の存在する地域は保存することに決定されていた。ところが、昭和60年９月22日に保存地域の丘陵に地割れが生じ、地滑りが起こる危険があるとの連絡を受けた。さっそく、現地をおとずれると、横穴古墳群の東寄りの地域に大きな地割れが幾条も生じ、天井部に亀裂が走る横穴古墳もあった。そのため、町で行う地滑り防止の応急工事に平行して、緊急に発掘調査を行い、記録をとることにした。安全のために天井に亀裂の入っている横穴古墳については、工事の進捗にあわせて、天井部を取り去ってから、内部の調査などを行ったので、天井部の状態が不明なったものもある。



第24図　位置と周辺の遺跡（国土地理院発行１／２万５千「大河原」を複製）



第25図　地形図と横穴古墳の配置状況

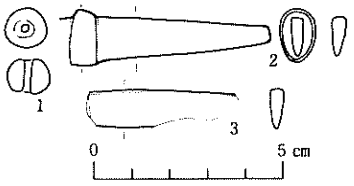
２．調査の結果

調査区の横穴古墳は丘陵の南斜面に立地し、東西約50m幅の区域に、西によって３基（第１～３号墳）、中央に４基(第４～７号墳)、東よりに２基（第８・９号墳）というように小群にわかれて分布し、合計９基ある。横穴古墳の標高は西のものがもっとも高く、東にゆくにつれ低くなる。

第１号墳

すでに開口していた。玄室から前庭部まで残存していた。

玄室は奥壁と天井部がすでに破壊されていた。平面形は前壁と側壁の形状から方形と推定される。縦断形は天井部崩落のため不明である。床面には径４～５ｃｍの円礫が全体に敷き詰められていたが、右壁に沿った部分はまばらであった。敷石上には炭化物が全体にみられ、床面や壁に焼けた痕跡がみられた。後世に玄室にもぐり込んだ者が火を焚いた痕跡であろう。なお、敷石上面から刀子２点と丸玉１点が出土した。玄門は平面形が逆台形で、床面の後半部には玄室から連続して敷石がみられた。敷石を取り去ると、床面中央に玄室との境から前庭部までのびている排水溝（長さ374、幅10～20、深さ７～８ｃｍ）が発見された。また、９個の凝灰岩があり、原位置を失っているが、玄門の閉塞石の一部とみられた。羨道は側壁の開き方から玄門と区別される。表門は側壁の開き方から羨道と区別される。前庭部の前方は崖となる。遺物は玉と刀子がある。１は石製の小玉で径12mmのものである。２は刀子の茎部の破片であり、身部との境にはばき（鉄製）がのこる。３は身部の破片である。



第26図　出 土 遺 物

第２号墳

すでに開口していた。玄室から羨道まで残存していた。

玄室は平面形が隅丸の長方形で、縦断形はアーチ形である。床面はわずかに凸凹があり、前壁に向かって緩やかに傾斜し、中央には排水溝（長さ138、幅約5、深さ約3ｃｍ）がみられる。天井部・側壁は風化しているが整形のための工具痕（長さ10～15ｃｍ）が観察される。玄門は平面形が横長の長方形である。天井部に近い左側壁にカギ形の痕跡があり、閉塞に使用した用材の痕と推定される。玄門前端にわずかに段があり、壁際に一対の方形ピットがみられる。閉塞用の用材を支えるためのものであろう。羨道は玄門とはわずかな段によって区別される。前方は後世の削平のため崖となり、わずかしか残っていない。

第３号墳

すでに開口していた。玄室から羨道の一部まで残存していた。

玄室は平面形が隅丸方形、縦断形はドーム形である。床面には径３～10ｃｍの円礫が全面に敷かれていた。敷石を取り去ると、床面中央に奥壁から玄門に達する溝（現存長260、幅８～20、

深さ２～４ｃｍ)が見られた。床面は玄門に向かって緩やかに傾斜している。面整形の工具痕跡（幅７～９ｃｍ）が、天井部から側壁中央部にかけては縦方向に、側壁下部では横方向にみられた。玄門は平面形がほぼ正方形で、玄門前端部に約３ｃｍの段差があり、閉塞施設となっている。羨道は側壁が玄門入口部で外側に開き、玄門と区別される。前方は削られて崖となる。

第４号墳

すでに開口していた。玄室から前庭まで残存する。

玄室は平面形が不整な楕円形で、床面は前壁に向かって緩やかに傾斜している。壁面は風化が著しいが、工具痕がわずかに残る。玄門は平面形が横長の長方形で、玄門前端に約４ｃｍの段差がある。玄門には積まれた状態で凝灰岩が10個あり、段とともに玄門閉塞に使用されたものと見られる。羨道は玄門入口で外側に開き、玄門と区別される。左側壁に沿って溝（長さ140、幅15～20、深さ２～４ｃｍ）がみられる。なお、羨道前端に約15ｃｍの段差がある。前庭は羨道とは段で区別され、左側壁が外側に開く。床面は凹凸が激しく前方に傾斜している。

第５号墳

すでに開口していた。玄室天井部に亀裂が生じていたため、天井部を取り除いてから調査したものである。玄室から前庭まで残存していた。

玄室は平面形が奥隅に丸みをもつ長方形である。床面は奥壁から急に傾斜し、前方で緩やかになる。奥壁と左側壁に沿って溝（幅10、深さ２～４ｃｍ）がある。玄門は省略され、玄室からすぐに羨道に連なる。奥壁から２ｍ手前で、右側壁はそのまま真直ぐのびるが、左側壁が外側に開くので、ここが玄室との境になる可能性がある。奥壁から約３ｍのところで両側壁が狭くくびれる部分があり、羨道と前庭を区別するものと考えられる。

第６号墳

第７号墳の上部にある変形した小形のものである。

玄室は平面形が長方形で、床面は前方に向かって傾斜する。玄室入口には約25ｃｍの段差がつき、２個の凝灰岩があった。閉塞施設と思われる。玄門・羨道は省略され、玄室の外側はすぐに前庭となる。前庭の平面形はハの字形で、右壁が内側に回り込み、不整の方形となる。

第７号墳

すでに開口していたが、玄室から前庭まで残存していた。

玄室は平面形が側壁中央の張るペン先形をしている。天井は低い。壁面や天井は風化が激しいが整形時の工具の痕跡が認められた。床面は凹凸が激しく、前方に傾斜する。玄門・羨道は省略され、玄室からすぐ前庭部につながる構造とみられる。前庭は玄室との境目で側壁が外側に開き、玄室と区別される。

第８号墳

発掘調査時に開口していなかった唯一のものである。玄室から前庭まで残存している。

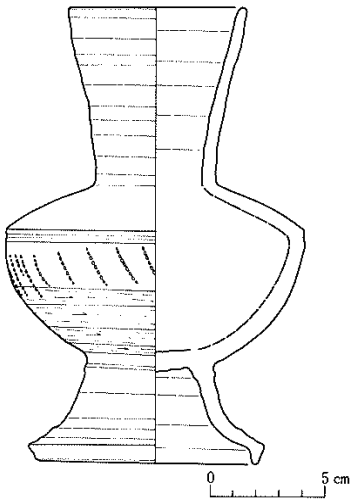
玄室は平面形が胴張りの長方形で、天井は低い。床面は凹凸が激しく、床面は奥壁から急に傾斜し、前方で緩やかになる。玄門・羨道が省略され、玄室からすぐ前庭につながる構造とみられる。前庭は両側壁が狭まって玄室と区別される。床面は緩やかに前方に傾斜する。

第９号墳

すでに開口していたが、玄室から羨道まで残存している。

玄室は平面形が隅丸の長方形、縦断形はアーチ形である。床面には奥壁から右側壁に沿って溝（幅10～15、深さ２～６ｃｍ）がめぐり、羨道部まで延びている。床面は凹凸があり、前方に向かって緩やかに傾斜している。壁面や天井は風化が著しいが、天井部から側壁にかけて縦方向の整形痕が見られる。なお、床面中央の右壁寄りで須恵器の台付壺が発見された。玄門は平面形が長方形を呈する。玄門前端に約５ｃｍの段差がある。玄門には凝灰岩が積まれており、段とともに使用された閉塞施設と見られる。羨道は玄門入口で外側に開き、玄門と区別される。平面形はほぼ長方形である。

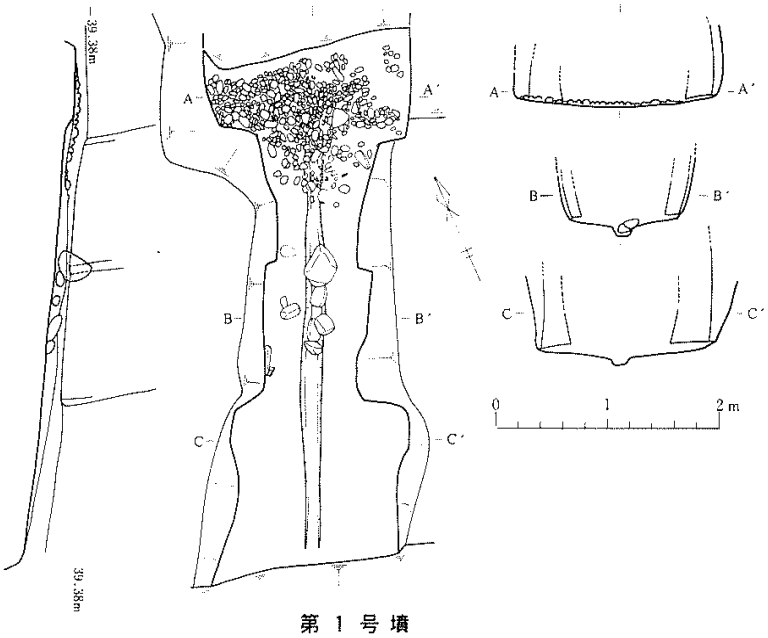
（出土品）　須恵器の台付壺である。口頸部は長く直線的で口縁端部は丸みをもつ。体部上半は肩が強く張って稜が付く。体部下部は丸みをもつ。稜線の下に櫛歯による縦位の刺突文がめぐる。ハの字に開く台部の裾は短く内傾し、長頸瓶の口縁部を逆さにしたような形態のものである。年代は７世紀末を降らないと推定される。



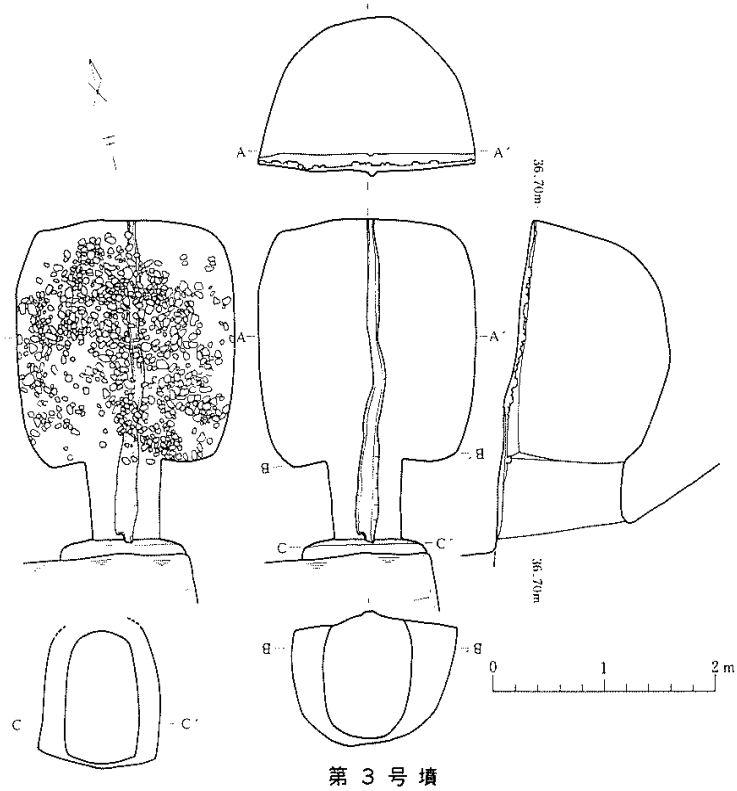
第27図　出 土 土 器

３．まとめ

調査区の横穴古墳は構造的に大きく分類すると、A群(第１～３・９号)：玄室から前庭部まで各部位がすべて揃い、形態も比較的整っているもの、B群(第４号)：各部位がすべて揃っているが、玄室の形態は不整なもの、C群(第５～８号)：玄門や羨道が省略され、玄室の形態もくずれているものになる。また、A群にしても棺座をもつものはなく、古墳群全体が簡略された傾向のものといえよう。形態の整っているものを古く、くずれているものを新しいと仮定すると、新旧は古い順にA群→B群→C群となり、第９号墳出土の須恵器からA群は７世紀後半に位置付けられる。

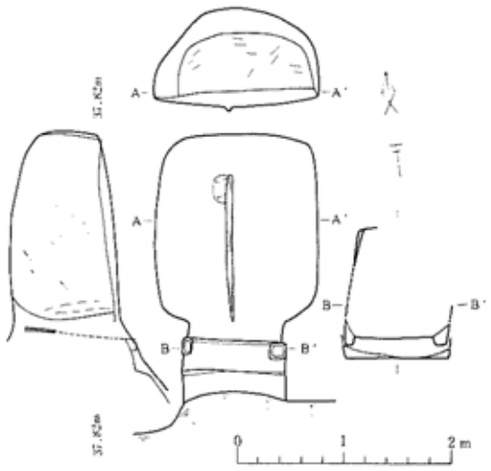


第 1 号 墳

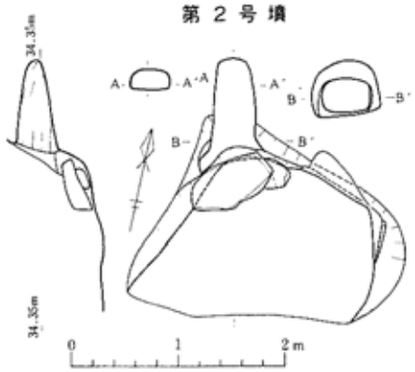


第 3 号 墳

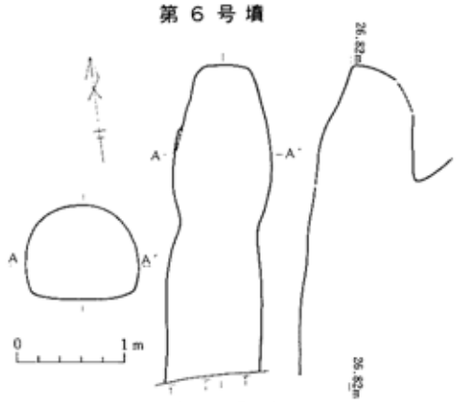
第28図



第２号墳

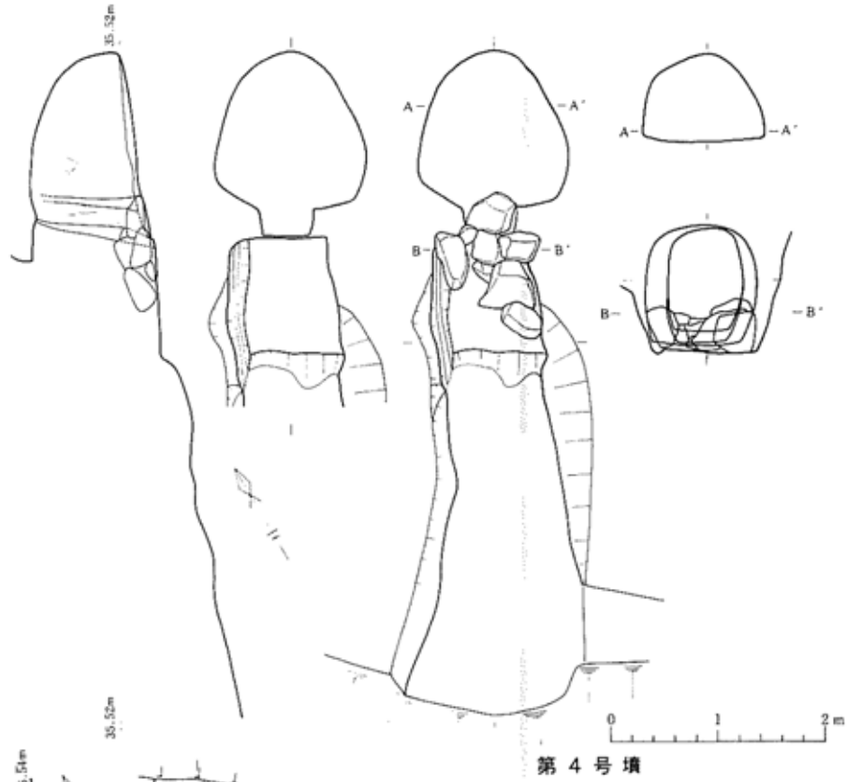


第６号墳

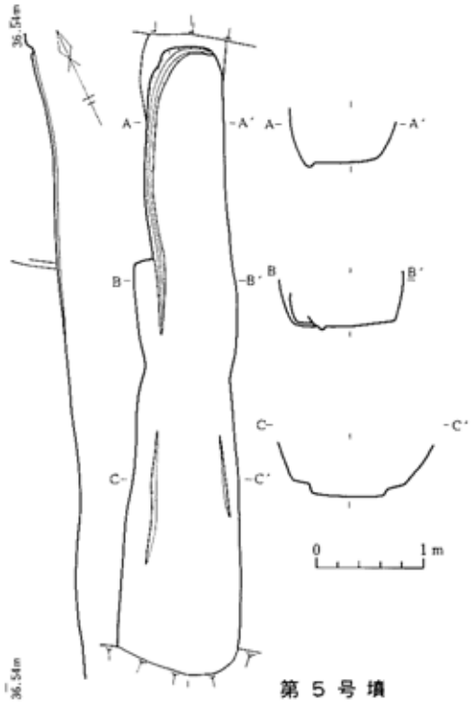


第８号墳

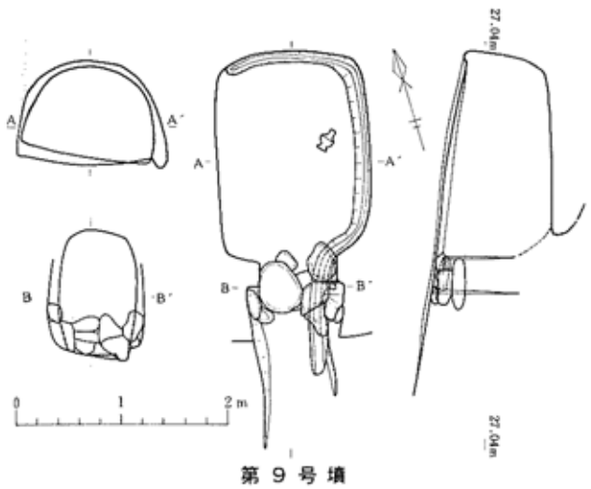
第29図



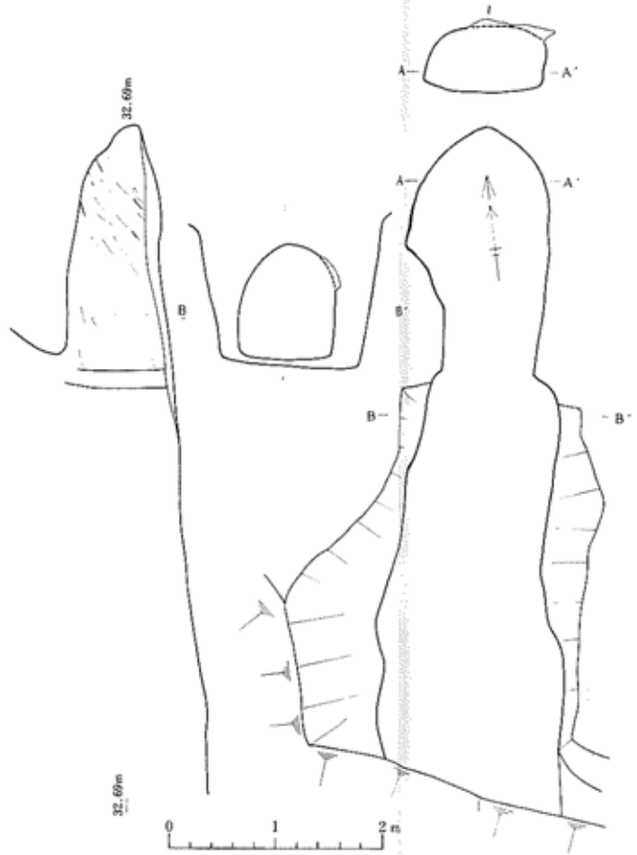
第４号墳



第５号墳



第９号墳



第７号墳

第４表　上谷横穴群集計表

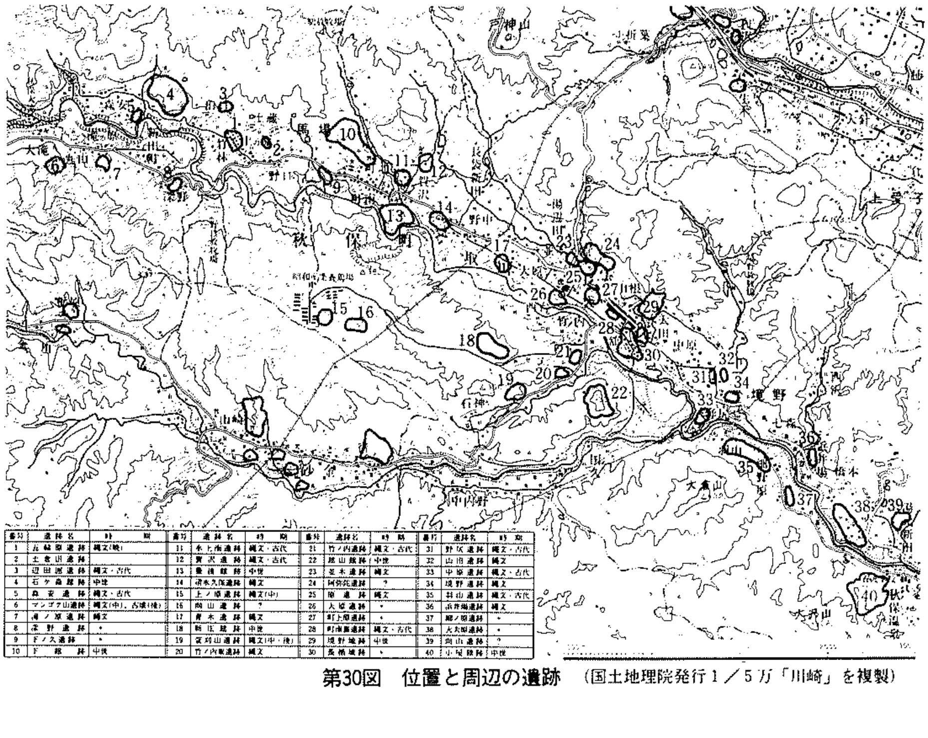
		第１号	第２号	第３号	第４号	第５号	第６号	第７号	第８号	第９号
全長		(480)	(250)	(295)	(625)	(600)	(240)	(600)	(300)	(375)
軸方向		N−23−E	N−9−E	N−12−E	N−30−E	N−26−E	N−15−E	N−8−E	N−8−E	N−18−E
玄室	奥行	(90)	175	208	144	200	85	230	144	200
	前幅	170	135	160	?	73	?	90	75	110
	奥壁幅	不明	76	155	?	55	?	?	50	134
	最大幅	185	154	195	142	75	40	110	92	144
	高き	(70)	95	132	97	(36)	35	96	85	110
	平面形	方形	隅丸長方形	隅丸方形	不整楕円形	長方形？	長方形	不整形？	側張長方形	長方形
	縦断形	不明	アーチ	ドーム	変形	不明	変形	変形	変形	アーチ
玄門	奥行	105	30	70	26					25
	幅	105〜70	97	62	50〜42					70
	高き	(55)	(105)	(105)	97					不明
	閉塞施設	凝灰岩	段・ピット	段	段・凝灰岩					段・凝灰岩
羨道	奥行	105	(48)	(100)	107	100				(150)
	幅	80〜95	(96)	(110)	(105)	95				50
	高き	(30)	不明	不明	(55)	不明				不明
	閉塞施設	—	—	—	段	—				—
前庭	幅	14〜160	不明	不明	95〜130	95〜115	190	130〜170	85〜90	不明
	長き	170〜140	不明	不明	330〜215	260	140	360〜350	110〜146	不明
備考		玄室・玄門に敷石、玄門〜前庭に溝	玄室に溝	玄室に敷石・溝	羨道に溝	玄室に溝				玄室・羨道に溝

単位はcm、(　　)は現存長

〔5〕 五輪原A遺跡

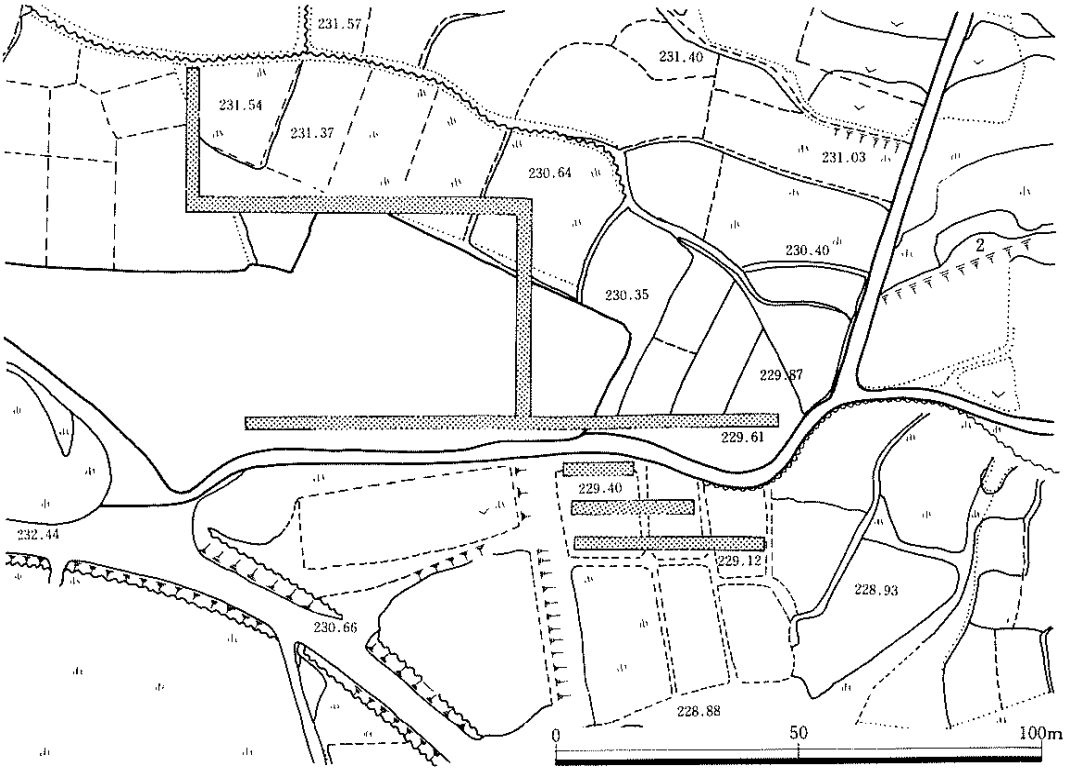
1．遺跡の立地と調査の概要

五輪原遺跡は名取郡秋保町馬場字竹林に所在し、名取川の左河岸段丘上の広い平坦面にあるが、よく見ると川に平行した細長い微高地状の部分に立地し、その背後の山際は低湿地となるようである。過去に晩期の壺・鉢などの完形土器が出土しており、宮城教育大学考古学研究部の分布調査では弥生土器の破片も見つかっている（文献１）。現況は畑地・廃車置き場・荒地・水田であるが、遺物が分布しているのは畑地と休耕田で、その他の地域は地表面からの観察では不明であった。そのため、県営ほ場整備事業地区内での遺跡の広がりを確認するため、深い掘削を必要とする排水路予定地と休耕田（現在、畑地）にトレンチを設定して調査を進めた。水田部分では第１〜３層が客土・耕作土で、第４層が黒土層で、若干の遺物が出土した。第５層も黒土層であるが無遺物層、第６層は段丘礫層であった。したがって、若干の遺物があるものの、良好な遺物包含層も遺構もないので、この地域は遺跡の中心部から外れると判断された。休耕田は表面に遺物が散布していたが、耕作土のすぐ下が段丘礫層で、遺構は発見されなかった。地区住民の話しでは、かって土器が出土したのは廃車置き場と畑地周辺で、この休耕田を開田する時に削平した土は西隣の畑地に盛り上げたという。現在畑地で採集される遺物はこの休耕田のところに包含されていたものかもしれない。したがって、遺跡の範囲は廃車置き場・



番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	五輪原遺跡	縄文(晩)	11	本上南遺跡	縄文・古代	21	竹ノ内遺跡	縄文・古代	31	野尻遺跡	縄文・古代
2	土倉田遺跡		12	賢沢遺跡	縄文・古代	22	越山館跡	中世	32	山田遺跡	縄文
3	辺田原遺跡	縄文・古代	13	豊森館跡	中世	23	並木遺跡	縄文	33	中原遺跡	縄文・古代
4	石ケ森館跡	中世	14	清水久保遺跡	縄文	24	阿弥陀遺跡	?	34	境野遺跡	縄文
5	森安遺跡	縄文・古代	15	上ノ原遺跡	縄文(中)	25	原遺跡	縄文	35	林山遺跡	縄文・古代
6	マンザワ山遺跡	縄文(中)、古墳(後)	16	向山遺跡	?	26	大原遺跡	〃	36	赤井畑遺跡	縄文
7	滝ノ原遺跡	縄文	17	青木遺跡	縄文	27	町上原遺跡	〃	37	細ノ原遺跡	〃
8	深野遺跡	〃	18	新庄館跡	中世	28	町南原遺跡	縄文・古代	38	大大原遺跡	〃
9	ドノ久遺跡	〃	19	笠和山遺跡	縄文(中・後)	29	境野城跡	中世	39	向山遺跡	?
10	下館跡	中世	20	竹ノ内東遺跡	縄文	30	長楯城跡	〃	40	小屋館跡	中世

第30図　位置と周辺の遺跡　（国土地理院発行１／５万「川崎」を複製）



第31図　五輪原遺跡トレンチ配置

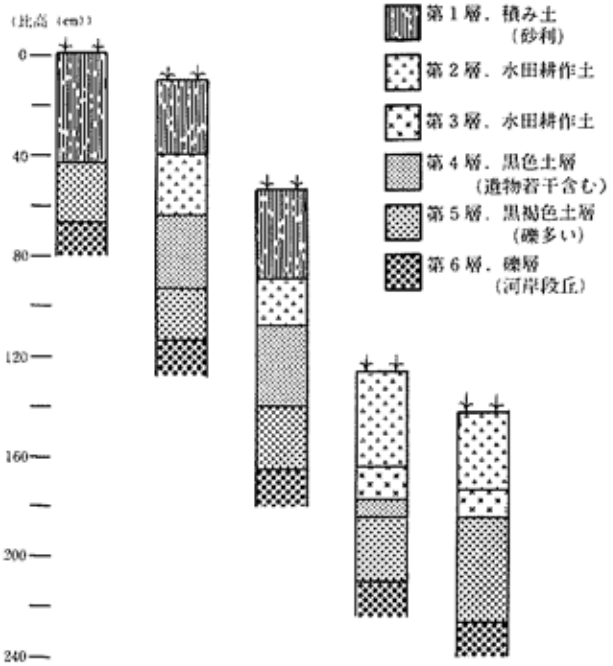
畑地とすでに破壊されていた休耕田を含めた範囲に限定されるようである。

２．出土土器

水田地区の道路に沿って設定した東西トレンチの中央付近で、第４層から散在した状況で出土したもので、一括資料ではない。すべて破片であり、全体の形を知り得るものはない。口縁部を中心に図示した。

１は口縁部が内弯する深鉢形で、頸部にややのびきった羊歯状文がめぐる。

８、９、27～29はほぼ直立する口縁部をもつ深鉢形である。８・９は口縁に２～３条の沈線が巡る。27～29は縄文の地文のみである。



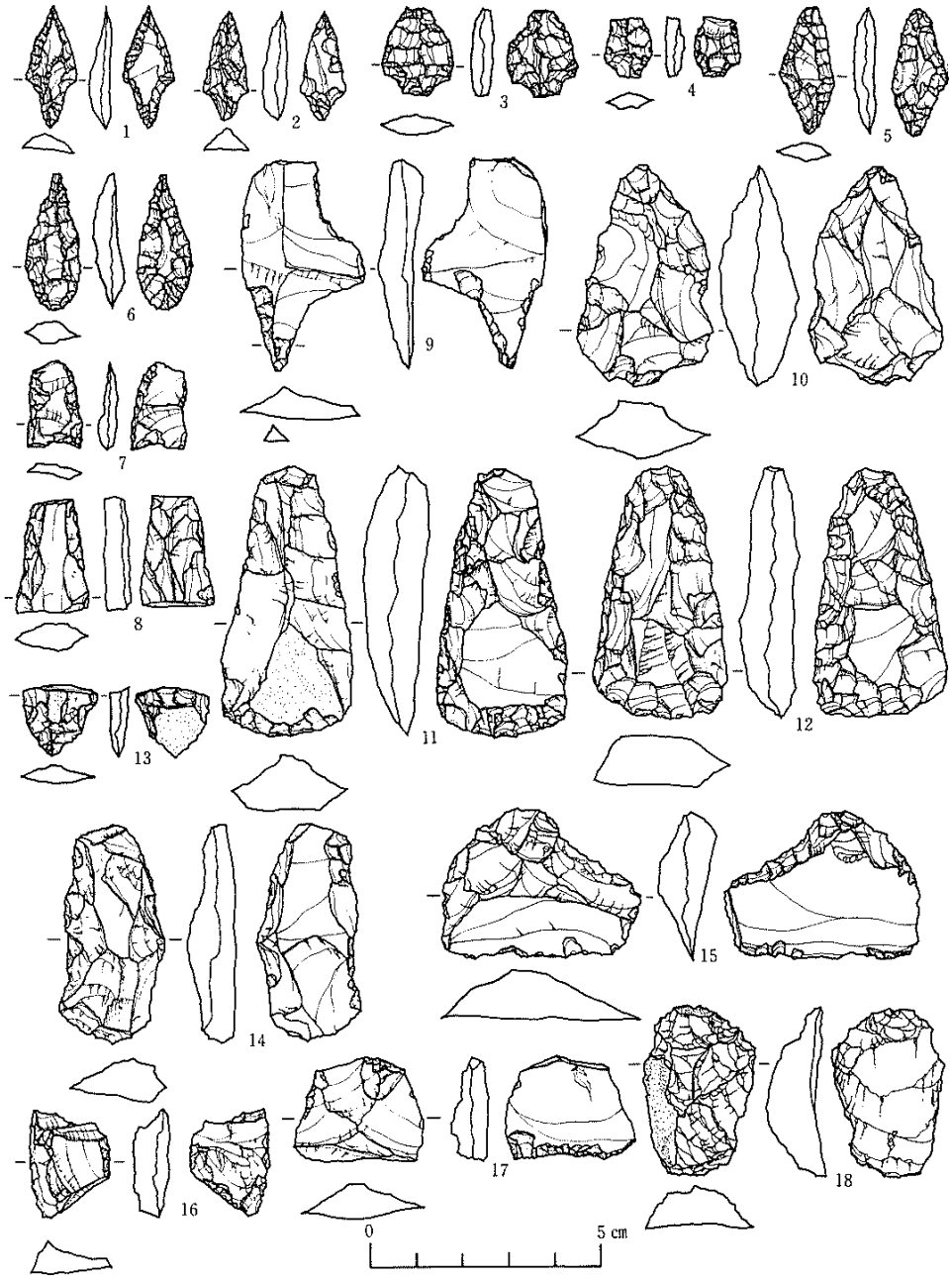
第32図　五輪原遺跡基本層位

３～７・10・11～20 は深鉢形で、器形にちがいが見られるが、「く」の字状の頸部をもち、口縁部は外反する資料を一括した。頸部に１～４条の沈線が巡るものが多く、そこに列点文が加わるものもある。口縁端に刻目がつくのも多い。胴部は縄文が施文される。平口縁が多いが、突起がつくもの、波状になるものもある。

26 は深鉢形の体部破片である。工字文による文様帯が巡り、その上下に縄文が施文されている。口縁部の状況は不明である。

22は口縁部が直線的に外反する皿形で、体部に磨消縄文文様が施文されている。

第33図　五輪原遺跡出土土器



No.	名称	長×幅×厚mm	No.	名　称	長×幅×厚mm	No.	名　称	長×幅×厚mm
1	石鏃	26×16×3.5	7	石鏃	18×13×3	13	不定形石器	15×16×4
2	〃	23×10×4	8	〃	(23)×16×6	14	〃	46×23×9
3	〃	(18)×16×4.5	9	石錐	44×27×7	15	〃	31×43×11
4	〃	(13)×11×4	10	楔状石器	46×30×12	16	〃	23×18×8
5	〃	27×13×4	11	〃	57×29×12	17	〃	22×28×8
6	〃	28×12×5	12	〃	52×30×11	18	〃	35×24×9

(　　)内は現存長

第34図　五輪原遺跡表採遺物

２・21 は浅鉢形である。２は頸部に平行沈線が巡り、列点文が加わる。胴部に磨消縄文文様が施文される。21 は底部破片で胴部に平行沈線文が巡り、底部に瘤状の小さな脚がつく。23～25 は壺の破片である。23・25 は無文の「ハ」の字形の口頸部をもつ。胴部は縄文だけが施文されるとみられる。

以上の土器の地文についてみてみると、無文のもの（17、18）・ＬＲ縄文(２、７、10～13、16、22～24、26、28)・ＲＬ縄文（３～６、15、27）・ＲＲ縄文（29）などがある。その他のものは欠損のため縄文について不明である。なお、28の縄文には結節がみられる。

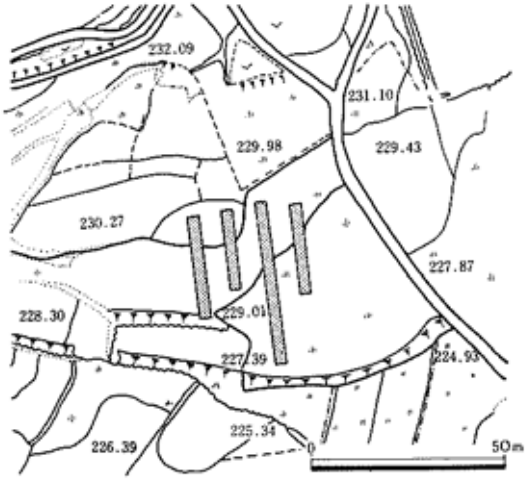
土器の年代はこれまでの編年研究に当てはめると、１・３が大洞Ｃ１式、２・４～11・13～24・26が大洞Ｃ２式、25は大洞Ａ式、28～30は大洞Ｃ１式～大洞Ａ式のいずれかに属すると見てよい。

３．表面採集の石器

発掘区からは石器が出土しなかったが、畑地で採集した石鏃（８点）・石錐(１点)・箆状石器（３点）・不定形石器（６点）を図示することにした。このうち、４・16・18は黒曜石で、他のものは珪質頁岩または珪化凝灰岩であった。黒曜石の石器は少ないが、剥片はかなり散布しており、これらの原石は次に説明する土倉田遺跡の付近で採集された可能性があろう。

〔6〕 土倉田遺跡

土倉田遺跡は秋保町馬場字土蔵に所在し、五輪原遺跡の東500mの地点にある。周辺は北側の丘陵裾部から張り出した台地状を呈し、南にむかって傾斜する。発掘前の現地調査で、畑地から須恵器や縄文土器の破片が数片採集されたが、最も目立つものは拳大のものから豆粒のように小さいものまで多数の黒曜石の原石が散布していることで、黒曜石の採取遺跡である可能性があると思われた。しかし、県営ほ場整備事業地区の牧草地にトレンチを設定して調査を進めた結果、表土下は直ぐ基盤の凝灰岩で、表土から黒曜石の原石が発見されたが、遺構や遺物は発見されなかった。したがって、事業地区は遺跡から外れると判断された。また、黒曜石の原石は基盤の凝灰岩には含まれていないので、近くから流れ込んだものであろう。東北大学埋蔵文化財調査委員会調査補助員の井上真理子氏によると、背後の山際で凝灰岩上に黒曜石の露頭を確認しているとのことである。



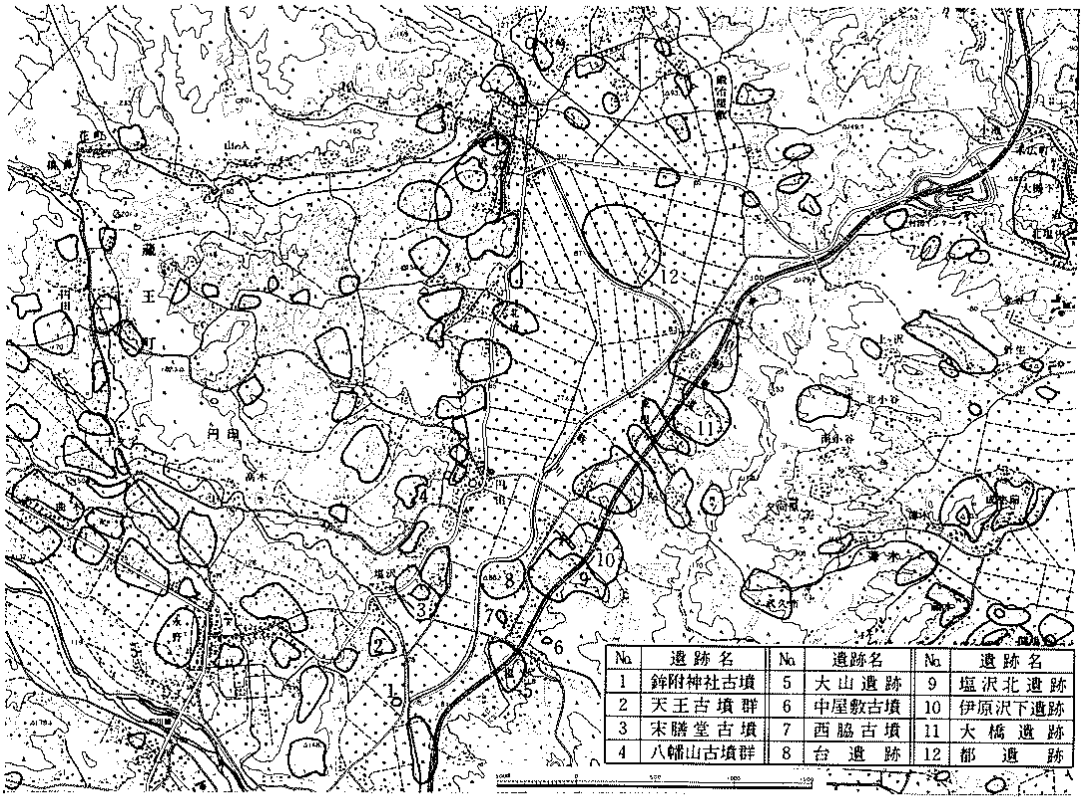
第35図　土倉田遺跡トレンチ配図

〔7〕 鉾附神社古墳

1．立地と周囲の環境

鉾附神社古墳は刈田郡蔵王町円田矢附字鉾附に所在する。古墳のすぐ東側を流れる藪川の流域は白石低地の北東部にあたり、南を除く３方から丘陵でかこまれて、円田盆地とよばれている。鉾附神社古墳はこの円田盆地の南寄りの水田に孤立して存在する円墳である。蔵王町史編纂委員会で作成した実測図によると、古墳の大きさは径約22m、水田面からの比高が約2.6mである。墳丘頂部には鉾附神社がまつられ、前面の斜面には石垣や階段などが作られている。また、近世以降の石碑などの石造物もみられる。墳丘斜面には樹木が繁茂しているが、葺石はないようである。これまでに遺物が発見されたこともない。北側に周溝がめぐるといわれるが、現状は平坦であって、地上からの観察では周溝と認めることは出来なかった。

円田盆地周辺で水田に立地する古墳は本古墳が１基あるのみで、他の宋膳堂古墳・天王古墳・八幡山古墳などは盆地の西縁に、中屋敷古墳・西脇古墳などは東縁の低い丘陵上に立地する。前２者の古墳は円筒埴輪を出土している。また、古墳時代の集落跡も盆地縁辺の低い丘陵裾部に多数あり、東北縦貫自動車道に関わる調査でも大橋遺跡で前期の住居跡、塩沢北遺跡で中期の溝が発掘されている。塩沢北遺跡の溝は方形周溝墓の周溝の一部であった可能性もある。いずれにせよ本古墳のみが低地の水田に立地するのは、この地域の他の遺跡の在り方からみれば



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	鉾附神社古墳	5	大山遺跡	9	塩沢北遺跡
2	天王古墳群	6	中屋敷古墳	10	伊原沢下遺跡
3	宋膳堂古墳	7	西脇古墳	11	大橋遺跡
4	八幡山古墳群	8	台遺跡	12	都遺跡

第36図　位置と周辺の遺跡（国土地理院発行１／２万５千「村田」を複製）

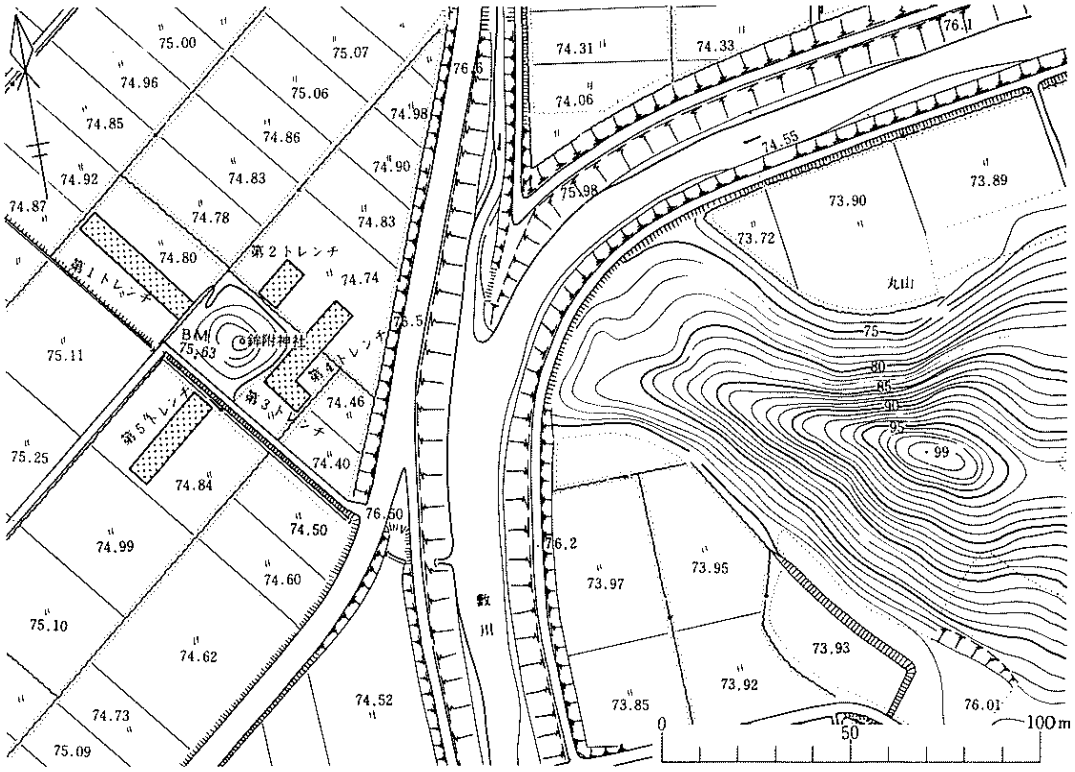
特異な存在といえる。

２．調査の経過と内容

調査の目的は、県営ほ場整備事業と関わりの生じた本古墳の周溝の確認と、周囲の水田に他の古墳が埋もれていないかを確認し、保存のための協議資料を得ることである。そのため、古墳の周囲の水田を対象に幅６m、長さ12～36mの５本のトレンチ（第１～第５トレンチ）を設定し、調査を進めた。

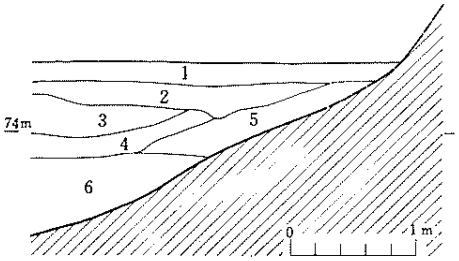
周溝の輪郭はどのトレンチでも確認できなかった。また出土品も全くなかった。

第１・５および第３トレンチの一部（古墳裾部）では表土下20～50ｃmで地盤に達するが、第２・４および第３トレンチの大部分では２m以上掘り下げても地盤に達することはできなかった。こうした部分はかって低地であり、スクモ層や砂層が厚く堆積していた。第３トレンチの古墳裾部の表土下で確認された地盤は東側にむかって急角度で傾斜してゆく。これをまとめると、本古墳は地盤の上に墳丘がある。この地盤は東側にせまる丘陵から低く延びてきていたものと推定されるが、墳丘裾部近くまで藪川によって深く削られている。本古墳には周溝はない。古墳の周囲には遺物が散布していない。周囲には湿地が発達している。そのため周囲に集落跡の存在はないとみられることなどがわかった。



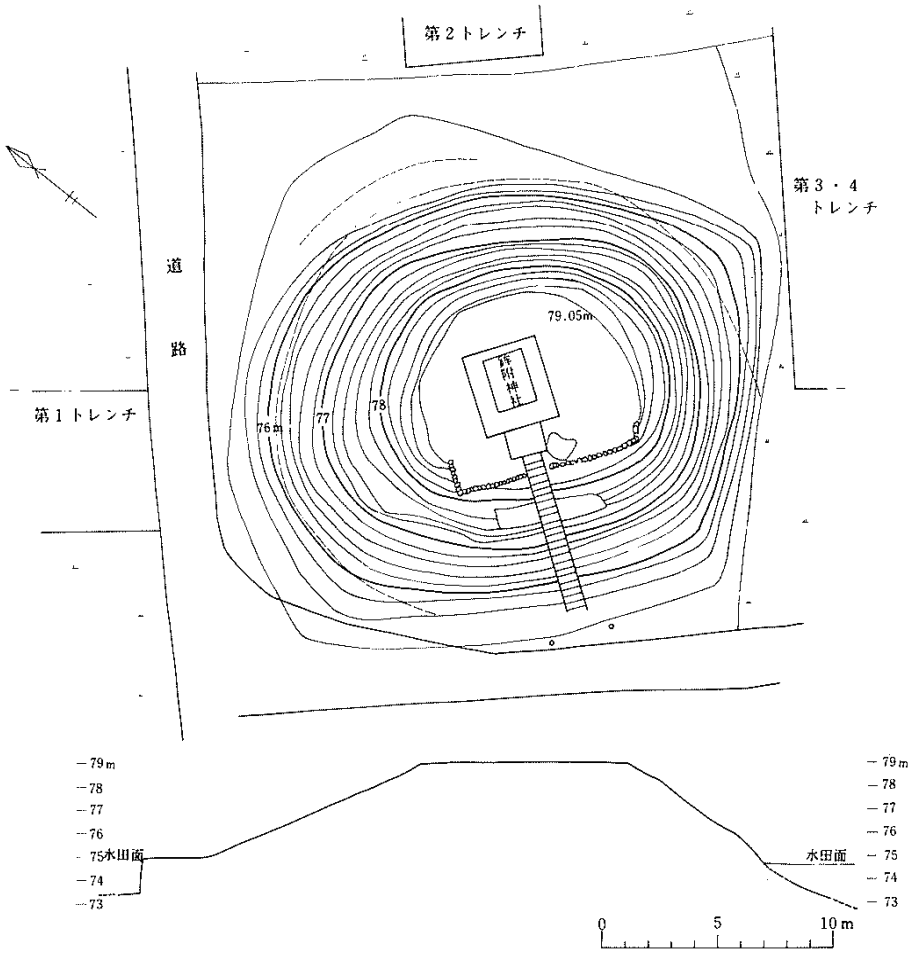
第37図　トレンチ配置図

以上から本古墳の墳丘は、それ自体が東側から延びていた丘陵の残丘である可能性がでてきた。周溝がないこと、周囲に遺物が散布しないこと、この地域の他の古墳と立地を異にしていることなどを考慮すると古墳でないことも考えられる。しかし、あるいは残丘を利用した古墳かも知れない。今回の調査では墳丘そのものが対象地区外であり、本古墳が本当に古墳であるかどうかは将来の墳丘の調査を待つことにする。



層No.	土色・土性	備考
1	オリーブ黒色(5Y3/2)シルト	水田耕作土
2	黒褐色(10YR3/2)砂	径2cm～5mmの小礫を若干含む
3	褐灰色(7.5YR4/1)粘土	スクモが分解したもの自然木を含む、地山崩壊土 } 酸化鉄が付着
4	黒色(10YR3/1)粘土	
5	暗褐色(7.5YR3/3)シルト	
6	黒色(7.5YR3/1)粘土	スクモが分解したもの、自然木を多量に含む、砂ブロック

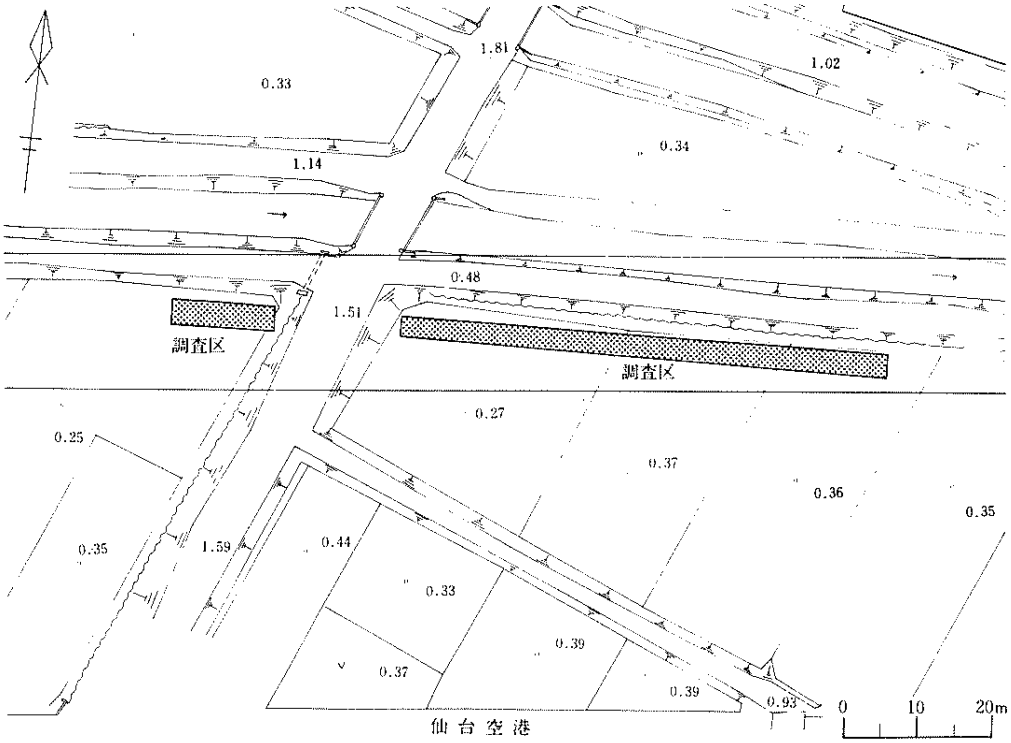
第38図　第３トレンチ南壁断面図



第39図　地　形　図　　（蔵王町教育委員会提供に一部加筆）

〔8〕 孫兵衛谷地遺跡

岩沼市下野郷字小谷地に所在し、阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地する。かっての開田工事の際に古墳時代前期の土師器が出土し、岩沼市文化財陳列館に保存されている。現状は水田で、遺跡の範囲はわかりにくい。そのため、県営かんがい排水事業に伴う水路付替部分に幅３m、長さ70mのトレンチを２本設定し、調査を行った。その結果、東トレンチの東端で微高地状の高まりが見られたが、すでに削平を受けて、旧表土は残存しておらず、わずかに耕作土のなかから土師器の砕片が出土したにすぎない。また、東トレンチの東部と西トレンチは深い湿地で、遺構・遺物は発見されなかった。以上のことから工事地区においては、微高地上の遺構もすでに失われており、湿地の部分には遺構・遺物がないと判断し、事前調査は行わないことに決定した。



第40図　トレンチ配置図

〔9〕矢ノ目遺跡

矢ノ目遺跡は丸森町小斉に所在し、阿武隈川によって形成された沖積低地の自然堤防上に立地する。今回の調査は、県営かんがい排水事業に伴い配水管が埋設される幅７ｍ、総延長約１ｋｍの部分を対象とし、遺跡の範囲や遺構・遺物の有無の確認を目的として実施した。

調査区の基本的な層位は以下のとおりである。

第１層：水田耕作土、厚さ約30ｃｍ。

第２層：褐色（7.5ＹＲ4/4）シルト層、厚さ約40ｃｍ。

第３層：粘土層、にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)と黒褐色(10ＹＲ3/2)粘土の互層、厚さ約80ｃｍ。

第４層：暗褐色（7.5ＹＲ3/4）のスクモと粘土の互層、厚さ約30～50ｃｍ。

第５層：灰色（5ＹＲ4/1）粘土層、地山。

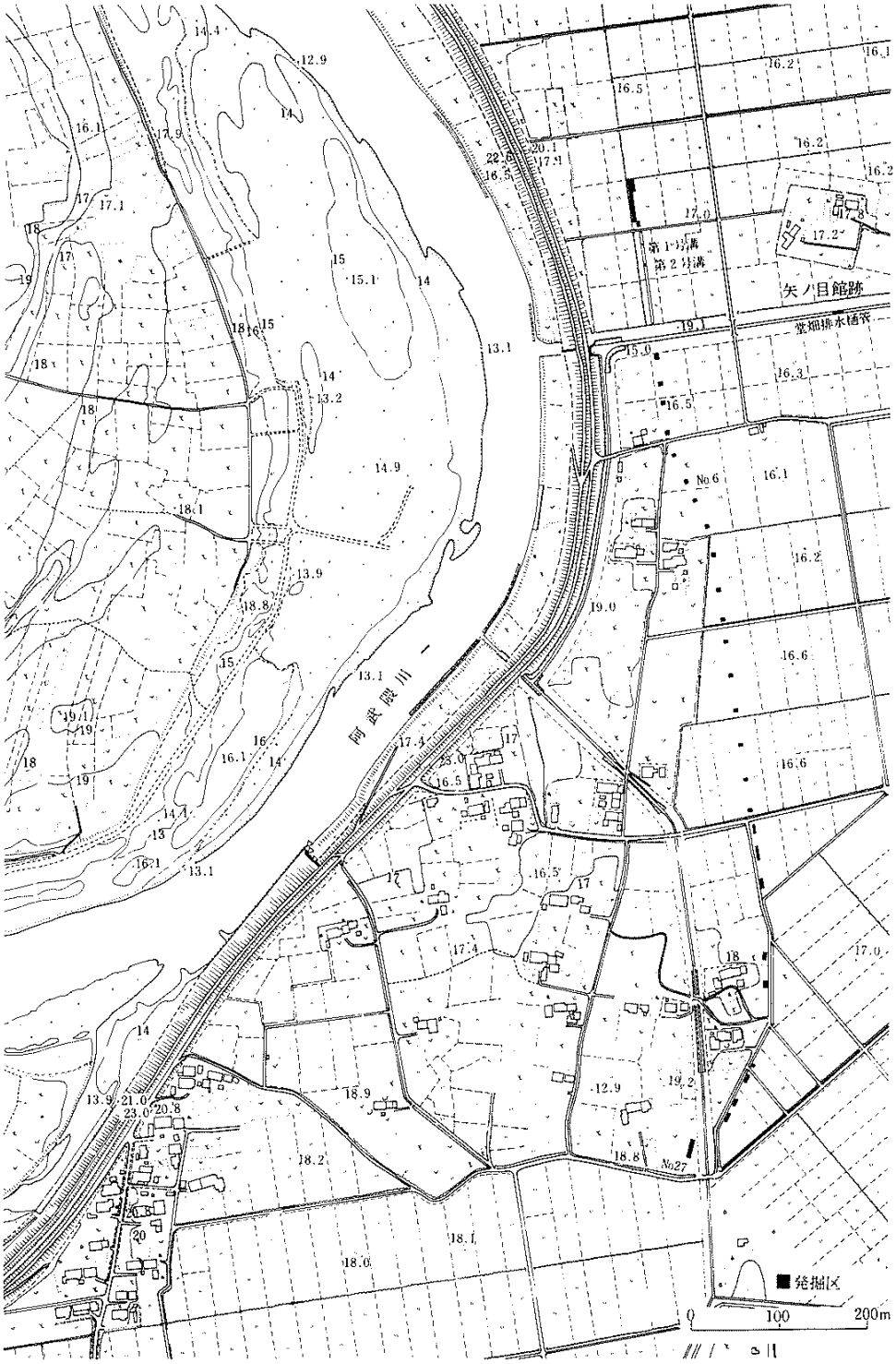
なお、第３・４層は南側の低湿地でみられるもので、北側の第Ⅰ・Ⅱトレンチでは第２層下は黄褐色（10ＹＲ5/6）砂質シルトの地山であった。

調査の結果、溝２条と土器を検出した。土器は磨滅した小片で、図示できるものはない。

溝はいずれも第Ⅱトレンチ中央部の第２層上面で検出したもので、東西方向に延びている。第１号溝は幅1.2mで、深さ0.6m、第２号溝は幅1.9mで、深さ0.3mである。出土品はない。しかし、第２層をほりこんでいることから平安時代以降のものである。

土器は、第Ⅱトレンチ南端部の第２層から土師器坏・高坏・甕、須恵器の甕が出土し、坏は表杉ノ入式期のものである。またNo.６とNo.27地点の第４層下部からは縄文が施された土器が少量出土したが、縄文土器か弥生土器かは不明である。

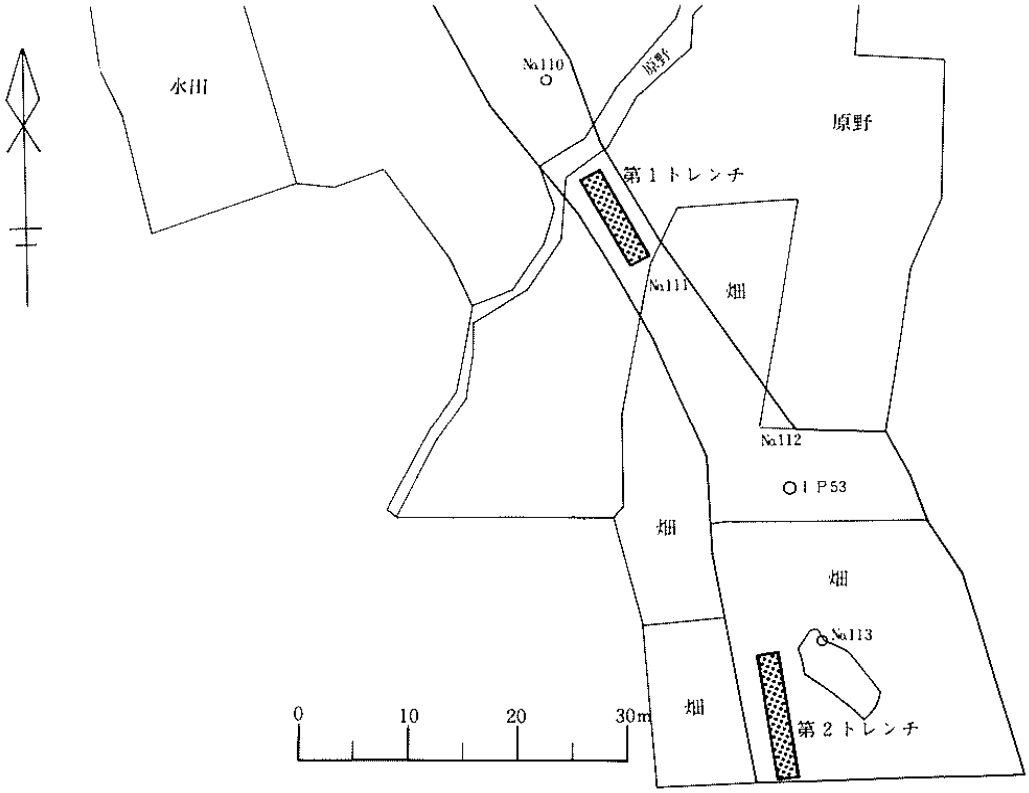
以上から、矢ノ目遺跡の南限は堂畑排水樋管付近で、これより南側は低湿地となっていると考えられた。



第41図　トレンチ配置図

〔10〕 菅生田遺跡

白石市福岡蔵本字菅生田に所在し、白石川左岸の沖積段丘上に立地している。調査対象地は仙南仙塩広域水道用水供給事業に伴う送水管橋建設部分であり、現状は水田・畑地であった。２ヶ所にトレンチ(２×10m、２×13m)を設定し調査をおこなったが、表土下30～40ｃｍで段丘礫層があらわれ、遺構・遺物とも発見されなかった。したがって、工事地区は菅生田遺跡の範囲外と判断し、事前調査は行わないことに決定した。



第42図　トレンチ配置図

〔11〕 前田遺跡

１．遺跡の立地と調査の概要

本遺跡は黒川郡大和町宮床字前田に所在し、南川左岸の河岸段丘に立地する。遺跡の周囲は盆地状で南から北に開き、緩やかに東南方向に傾斜している。標高は93～96mである。現状は休耕地・草地などであるが、もとは水田で開田の時に一部削平され、旧地形が失われている。周辺には立輪遺跡・四十八滝遺跡・根古遺跡などの縄文時代の早期から中期にかけての遺跡が多い。

前田遺跡は南川ダムに水没する遺跡である。今回は事前調査の積算資料を得るための範囲確認調査で、遺跡の立地する台地の傾斜に沿って南北方向に幅２m、長さ22～46mのトレンチを５本設定し、調査を進めた。その結果、埋設土器を２基発見し、その周辺の調査区を拡張したが、表土下が直ぐ地山で、その他の遺構や遺物包含層は発見されなかった。そのため、遺跡の大部分は削平のためすでに破壊されていると判断し、事前調査は実施しないことにした。

２．発見された遺構

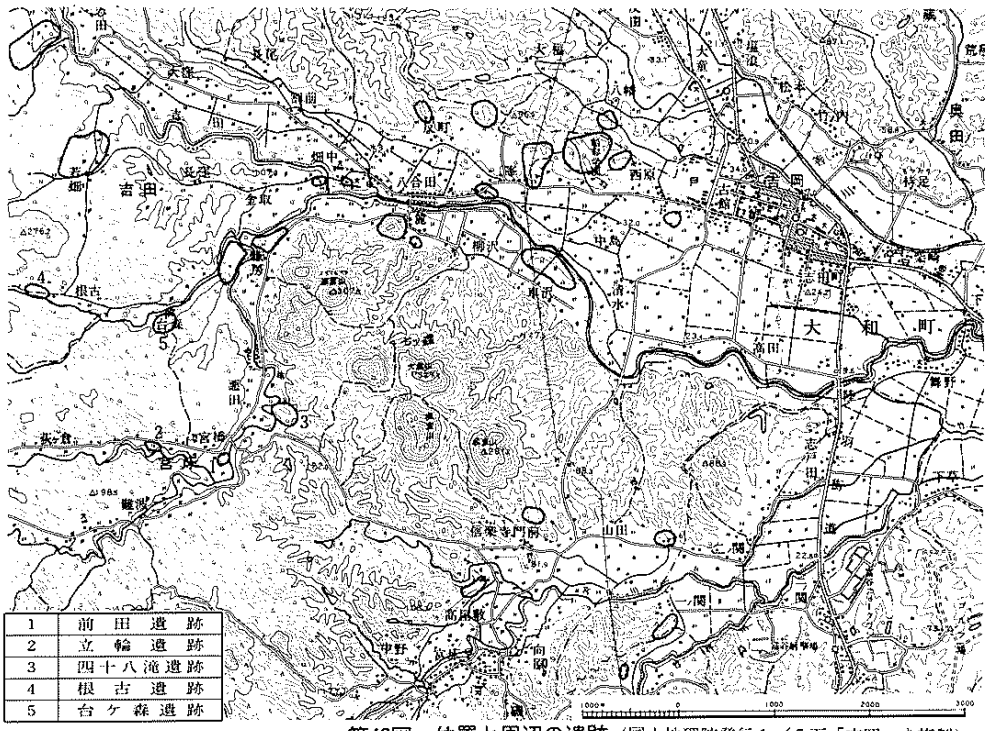
埋設土器遺構が約40ｃmはなれて２基（１・２号）並んで検出された。

第１号：胴下部を欠く大形の深鉢土器が口縁部を上にして埋設されていた。周囲に80×95 cmの楕円形の掘り方の輪郭が確認され、深さは約35ｃmあった。土器の下端は掘り方の底面に接していない。土器の口縁部は壊れて、内側に倒れ込んでいた。また、土器の内部下端には径30 cmほどの偏平な河原石が平らに据えられていた。土器の内部には少量の焼土を含む暗褐色土が堆積していた。掘り方の埋め土は暗褐色土を含む黄褐色土である。なお、土器は、口縁部が外反し、胴部がやや脹らむ深鉢形で、径約40ｃmの大形品である。口縁に波状突起がつき、端部は肥厚する。胴部に太めの沈線で曲線的な区画文が描かれ、ＬＲ縄文が充填される。時期は大木10式である。

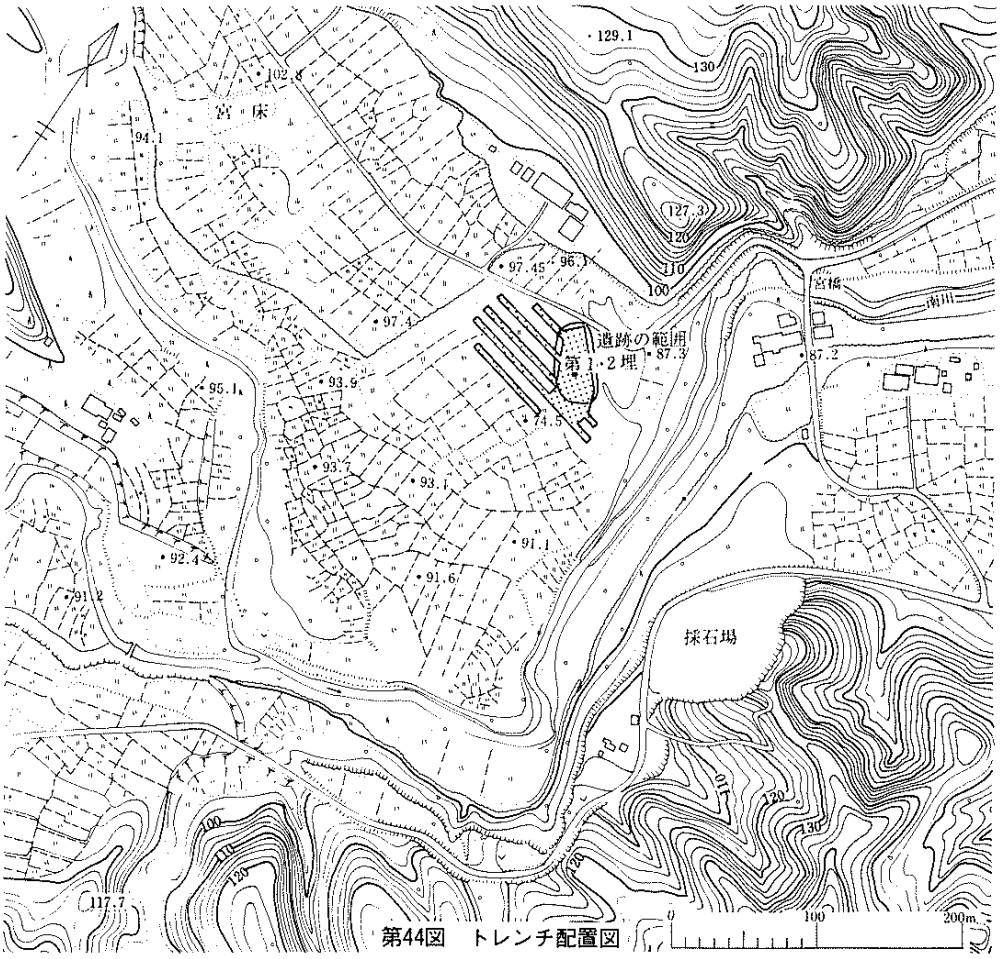
第２号：１号の南西側にある。体部上半を欠く深鉢土器が正位の状態で埋設されていた。周囲に50×60ｃmの楕円形の掘り方の輪郭が確認され、深さは約24ｃmあった。土器の下端は掘り方の底面より６～８ｃm上である。土器の内部には締りのない黒褐色土が堆積していた。掘り方の埋め土は暗褐色土を含む黄褐色土である。なお、土器の胴部にはＬ撚糸文が施文されている。底部に穿孔などは認められない。土器の所属時期は不明であるが、遺構が第１号に近接していることや掘り方の埋め土が類似することから、１号と同じ型式に属すると思われる。

以上の埋設土器遺構は、少なくとも住居跡に伴うものではなく、独立した遺構である。埋葬施設などの可能性があるが、決め手はない。

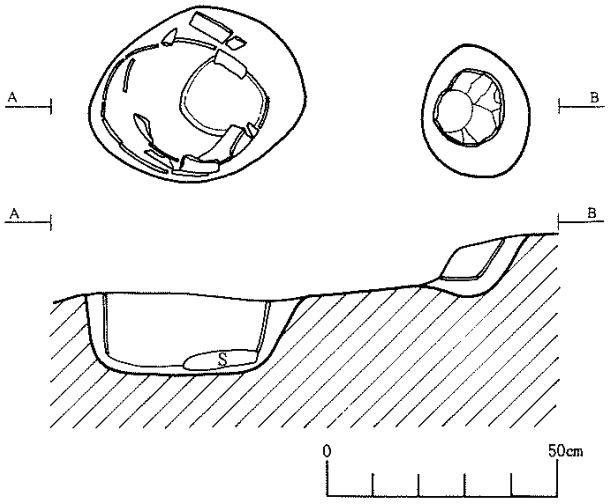
その他：早期中葉の土器片が１点、胎土に繊維を含む早期末から前期初頭にかけての土器片が１点、横長の石匙（頁岩）が１点表採されている。



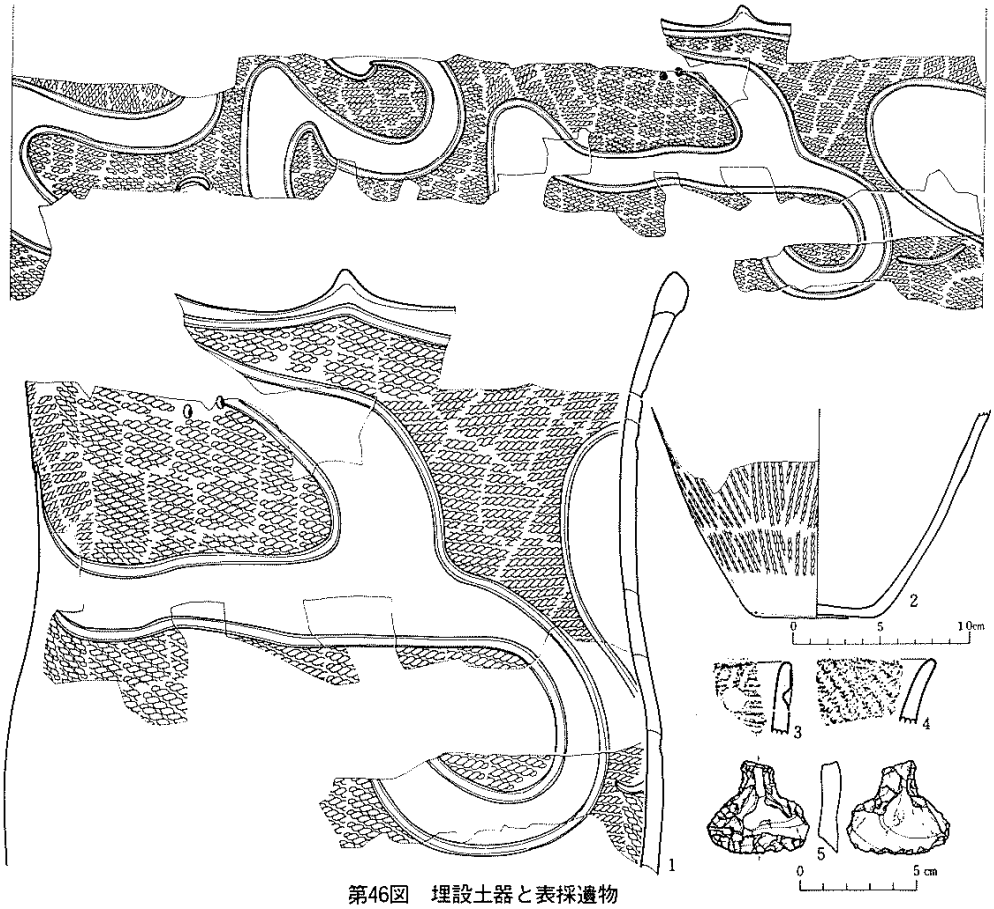
第43図　位置と周辺の遺跡（国土地理院発行１／５万「吉岡」を複製）



第44図　トレンチ配置図



第45図　第１・２号埋設土器遺構



第46図　埋設土器と表採遺物

引用文献

文献１：宮城教育大学考古学研究会「名取川水系遺跡分布調査」『宮教考古３』６・７頁 1971

文献２：若柳町町史編纂委員会編「第１編　第１章　原始及び古代の遺跡」『若柳町史』68～69頁 1974

文献３：伊東信雄・須藤隆「山王囲遺跡調査図録」一迫町教育委員会 1985

文献４：斎藤･高橋･真山「宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第69集－東北自動車道遺跡調査報告書』3～262頁 1980

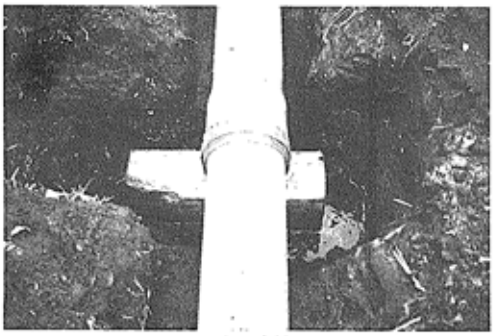
文献５：加藤道男「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書第85集』1982

文献６：大河原町史編纂委員会編「第１章　原始・古代の郷土」『大河原町史』55・56頁 1982

写　真　図　版

里浜貝塚調査区近景

貝層の状況



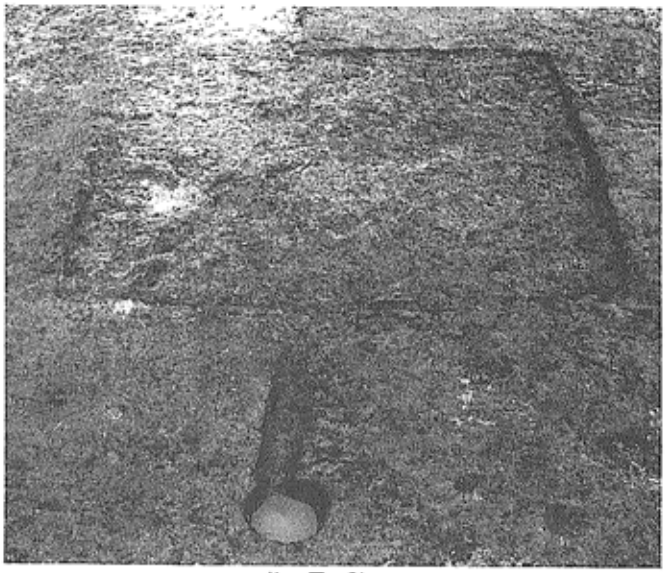
工事の方法

骨角牙製品

土　　壙

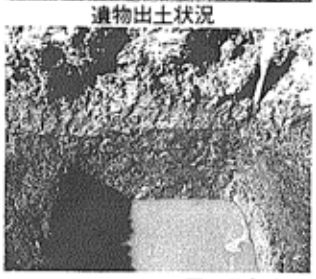
柴の脇遺跡遠景

図版 1

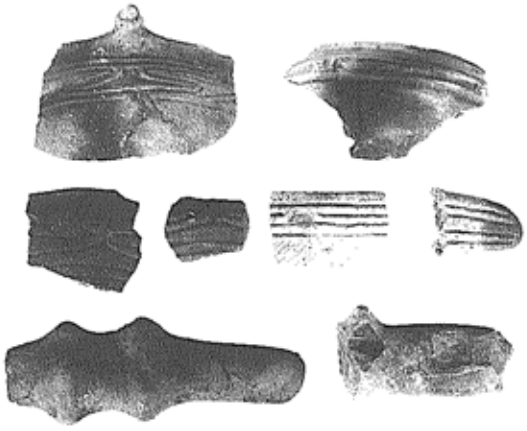


住 居 跡

遺物出土状況



E－7区遺物包含層断面



出 土 遺 物

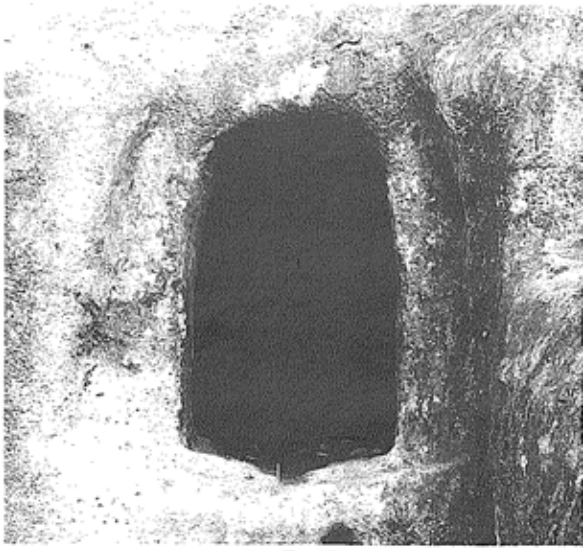
上谷横穴古墳群全景

図版 2

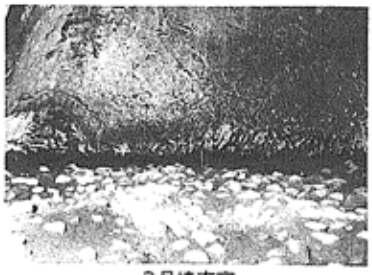
1　号　墳

1号墳敷石下の状況

2　号　墳

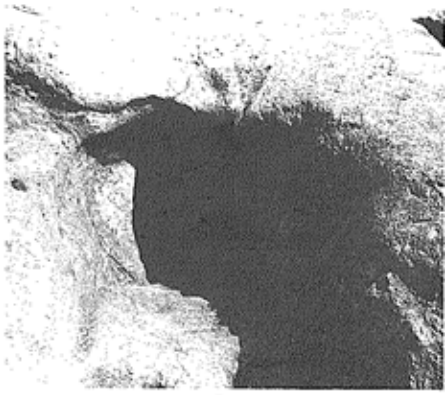


3　号　墳



3号墳玄室

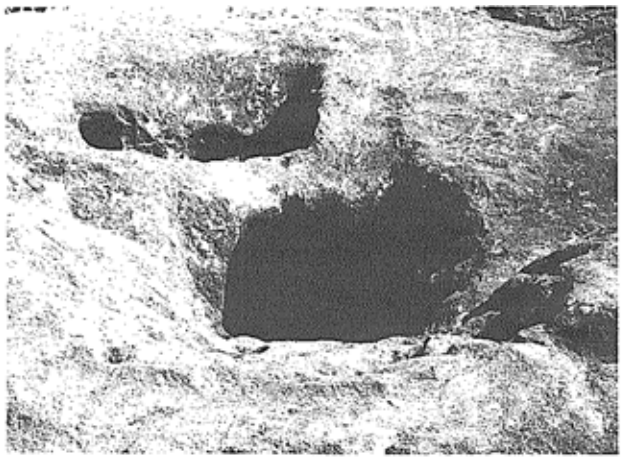
4号墳玄門閉塞石



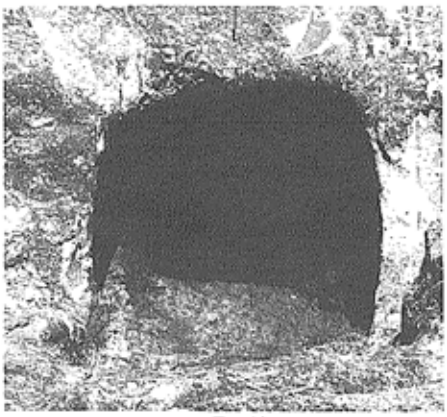
4　号　墳

図版３

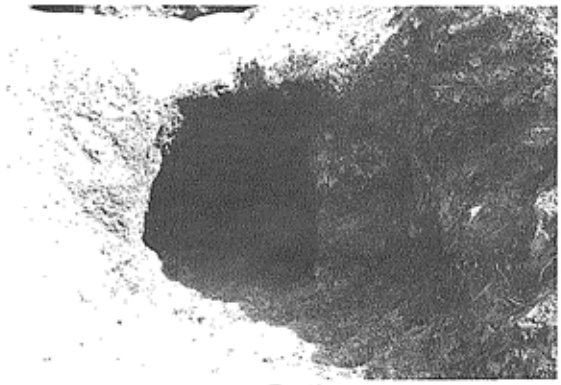
6 号 墳



6・7号墳

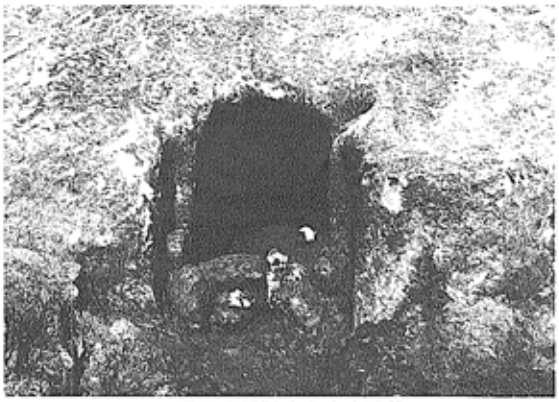


8 号 墳

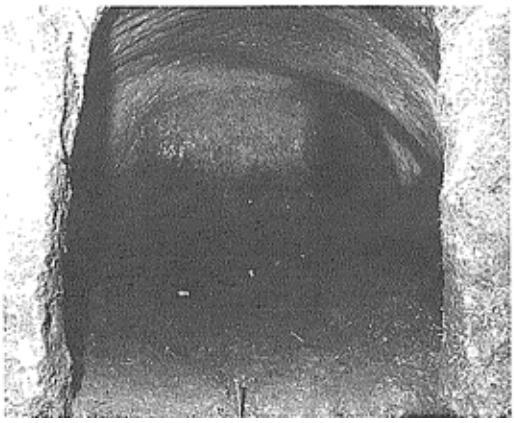


7 号 墳

9 号 墳



9号墳玄門閉塞と出土遺物

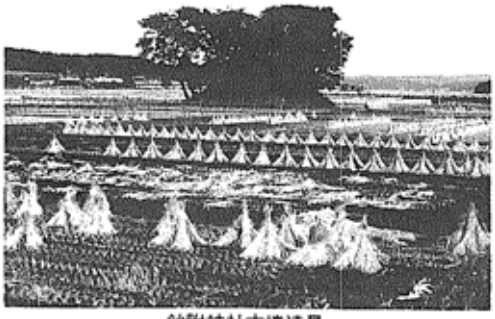


9号墳玄室と工具痕

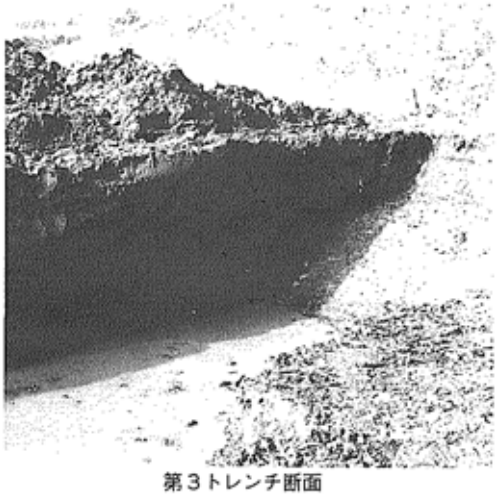
図版 4

五輪原遺跡調査区

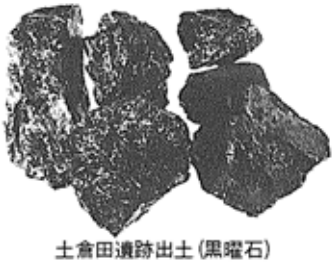
土倉田遺跡調査区及び発掘風景



鉾附神社古墳遠景



第３トレンチ断面



土倉田遺跡出土（黒曜石）

矢ノ目遺跡遠景

図版５

調　査　区

菅生田遺跡遠景

前田遺跡遠景

第１・２号埋設土器遺構

図版６